

武装神姫 《Another  
er / Side》

夜斗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日本中を震撼させた神姫テロ事件から3年後——舞台は都心より少し離れた『御神楽町』

一ノ瀬真琴は自分の神姫『ガーネット』や神姫部のメンバーと共に、町で一番の大規模神姫バトル大会『戦女神杯』優勝を目指し、様々な神姫やマスターと出会い、戦いを繰り返し成長していく。

やがて彼を待ち受けるものとは——バトルあり、緩い日常ありの、新しくも異なる武装神姫ストーリー。

ゲームやTVアニメーションなど、マルチな展開を見せ、今なお武装紳士を魅了して

止まない武装神姫。

そんな魅力を、少しでも伝えられたらいいなと思っています。

# 目次

## プロローグ

序章 〔上〕 1

序章 〔中〕 11

序章 〔下〕 19

## 第一章 〔ビギナーズ・ラック〕

第一章 第1話 33

第一章 第2話 45

第一章 第3話 60

第一章 第4話 74

## 第二章 〔神姫誘拐事件〕

第二章 第1話 89

第二章 第2話 98

第二章 第3話 112

第二章 第4話 122

第二章 第5話 132

第二章 第6話 146

第二章 第7話 157

## 第三章 〔避暑地に響く砲火〕

第三章 第1話 165

第三章 第2話 174

## プロローグ

## 序章 【上】

「それでは、自己紹介をお願いするわね」

クラス担任の先生に促され、彼は自分の名前を白チョークで黒板に書いていく。ちよ  
うど名字を書き終えた辺りで不意に背後がざわつき始めた。

「……あれ、もしかして……?」

「偶然じゃね?」

「いやでも……」

小声でひそひそと話し合う言葉の凡<sup>おおよ</sup>その見当は付いている。そのまま名前まで書き  
進めると、彼は少々ぎこちない動作で振り返った。

「その、初めまして。『一ノ瀬<sup>イチノセ</sup> 真琴<sup>マコト</sup>』と言います。……よろしく」

「はいはい! 質問です!」

真琴が名乗り終えたところで、活発そうにツインテールを揺らす女子が我先にと言わ  
んばかりに大きく右手を上げた。その瞳は好奇心の光に満ち溢れ、爛々と輝く視線が光  
線のように真琴に注がれている。

「あー、こほん。色々気になるとは思うけど細かな質問は後でお願いするわ。それと……真琴君の席は、あそこね」

「は、は、は」

やや上ずった声で返事を返し、真琴は先生に指示された座席——窓際の最後列にぽつんと空いた席へと移動する。右隣には俯いている女の子、前には眼鏡を掛けた男の子が座っていて真琴に振り返ると優しく微笑みかけてくれた。

「真琴君でいいかな。僕は『天城<sup>アマキ</sup>蓮<sup>レン</sup>』って言うんだ。よろしく」

「よ、よろしく」

転校初日に向こうから話しかけられて、真琴は内心でホッと安堵の息をついた。自分から話しかけるのが得意ではないし、人生で初の転校ともなると不安で胸がいつぱいに埋め尽くされてしまうのだ。

「僕も、蓮君でいいかな」

「呼び方は自由でいいよ。それより、僕も色々聞きたいことがあるんだけどいい？」

「うん、休み時間になったら」

わかった、と小さく頷くと彼は正面に向き直ってしまった。彼も僕のこと、それよりも「姉」のことに興味津津なのだろう。一部の生徒——先ほどのツインテールの少女も含め——も熱のこもった視線をこちらに向けている。彼らも休み時間が待ち遠しい

のだろう。反面、熱視線を一身に浴びる真琴はあまり快い気分にはなれずにいた。

※

そして生徒待望の休み時間——ただし、真琴は除く。

定時を知らせるチャイムが鳴るのと同時、ホームルーム中に熱視線を送っていた生徒たちがこぞつて真琴の元へと集まり、次から次へと矢継ぎ早に質問攻めを浴びた。

「真琴君つて、もしかしなくても風花さんの弟？」

「風花さんつて、普段はどんな人なの？」

「風花さんつてどんな武器が好きなの？」

「こ、好みのタイプとかは？」

「今は何処にいるの？」

質問の内容のほとんどが予想通り「姉」に対することばかりだったのは少々救いだっただろうか。真琴は当たり障りないような言葉を選びそれぞれに対し丁寧に答えていく。

ある程度姉への質問が終わると、やがてその対象は真琴へと移り変わる。

「真琴君は『神姫』持つてるの？」

真つ先に恐れていた質問が投げかけられ真琴は一瞬言葉を詰まらせる。返答は既に出来上がっているのだからそれを素直に答えればそれでいい。だけど、そうすることで

目の前で嬉々と返答を待つ彼らを失望させてしまうのが酷く嫌だった。

とはいえ、誤魔化すわけにもいかない。真琴は首を横に振って正直に答えた。

「えつと……その、僕は自分の神姫持つてないんだ。……ごめん」

「なあんだ、そつかあ……」

途端に彼らの熱が失せ集まっていた生徒が誰からともなく真琴の席を去っていく。ぞろぞろと、まるで蜘蛛の子散らすかのように。最終的に残っていたのは最初に手を上げていたツインテールの少女と、真琴の席に隣接する蓮に、未だ俯きっぱなしの少女だけだった。

「やっぱり、がっかりさせちゃった……よね」

「そりゃアタシもガツカリだよー。」

ヴァルキリーカップ  
戦 女 神 杯チャンプ

の弟さんだから、てつき

りすつごい神姫持つてて強いんじゃないかなーって思ってたのに、まさか神姫すら持つてないだなんて。ねえ、二ニ?」

ツインテールの少女が自分の肩に向けて声を掛けると、ひよいと三角の耳が飛び出しそのまま彼女の肩に小さな姿を見せた。

『そだねー、二ニもワクワクしてたのにシヨボンだよー』

少女の肩の上に現れたのは、全長15センチ程度のフィギュアロボット『神姫』だった。俗にマオチャオ型と呼ばれる彼女はネコをモチーフとされた非情に愛くるしいデ



ザインで、どちらかと言えば子供に人気のある神姫だった。ニニと呼ばれた神姫は、まるで顔文字のようにコロコロと表情を変化させながら持ち主である少女と会話している。

「君は神姫を持つてるんだ？」

「見ての通りでしょー。あ、そういえば名前言ってなかったつけね。ワタシは『鬼灯ほおずき』ね』って言うんだ。で、こっちは相棒の『ニニ』」

『ニニだよー。よろしくー』

ぺっこりと、礼儀正しいというよりも勢いでお辞儀したような形でニニが名乗る。少し気後れを感じつつも、真琴も軽く会釈で挨拶を返しておく。

「鬼灯さんと、ニニちゃん……だね。うん」

「えー？ 何それ。そんな『さん』付けとかしなくていいよー。ワタシのことはねねで、ニニのことはニニでいいよー！」

「えつとじや……ねねちゃんもニニも、よろしく」

『はいはいー。よろしくー』

マオチャオ型といえ、語尾が『くにゃ』だと勝手に思い込んでいた真琴からしてみれば、ねねの持つニニは少し変わっていて面白かった。マスターが違えば神姫も違う、そんな典型的な光景だ。

『じゃあ、次はアタシが名乗る番かな』

次いで、今度は蓮の方から凜とした女性の声が聞こえてきた。いつの間にか彼の肩にもねねと同様に神姫が立っていた。腕を組み仁王立ちする彼女はエウクランテと称されるセイレーン型神姫。素体のペイントやその立ち振る舞いから凜々しいお姉さんのような印象を受けた。

「改めてだけど、天城蓮。そして僕の神姫の『ハヤテ』」

『蓮の友達は大アタシにとっても友達だ。よろしく』

「よ、よろしく」

既に目の前には二人の神姫とマスターがいる。中学生で個人用の神姫を持っているとは羨ましい限りだった。

神姫は、一介の中学生に変えるほど安価な代物ではない。

昨今の神姫の普及につれ数年前に比べれば値下げされたとはいえ未だに高額なのである。それこそ、神姫一体の値段で高性能のPC一式が買い揃えられてしまうほどに。だから、今ここで手にしている彼らはある種「幸運」な人たちだ。

「そうだ、彼女の事も紹介しておくよ。ほら、西園寺さん」

「は、はひい！」

蓮の呼びかけにそれほど驚いたのか、ガタンと椅子を後方に吹き飛ばしながら——西

園寺と呼ばれた少女はギコギコと油の切れた人形のような動作で真琴に振り向いた。

「さ、ささ、さいおん……じな、なな……み……」

「七海ちゃん、そんなノミみたいな声じゃ聞こえないよ」

「で、でもあの、だからその、あのあの、えつと……」

極度の人見知りなのだろうか、それとも極度の上がり症なのか、或いは両方なのか。ねねに促されても真つ赤な顔を右往左往させながら慌てふためくばかりで自己紹介も何もあつたものではない。そんな彼女のようなタイプの人と初めて接する真琴もまた同義ではあつたが。

『では、せんえつ僭越ながら私からご紹介いたしましょうか』

またも聞こえた女性の声に視線を落とすと、彼女の机の上に別の神姫が現れた。黒のシックなスーツに身を包んでいたのは火器型MMSのゼルノグラード。本来であれば、その名の通り全身を火器を纏うミリタリーな神姫であるはずなのに、今の彼女はそんな火薬の匂いとは程遠そうな出で立ちである。メイド。いや、執事だろうか。女性が執事というのはどうにも違和感があるような気が。

『申し遅れました。私は七海お嬢様の身の回りのお世話などをさせていただいております『プリユイー』と申します。そして、こちらの——』

「ぶ、プリユイー！ ああ、じ、自己紹介ぐらい、出来ます！ だから」

『では、どうぞ』

「あ、あう……の、えつと」

何度も視線を彷徨わせ、幾度と髪の乱れを整え、やや大げさに見えなくもない挙動で息を整え——彼女はようやく真琴に向き直った。

「わ、私……さ、『西園寺<sup>サイオンジ</sup> 七海<sup>ナナミ</sup>』って言います。じゅ、十五歳で趣味は読書と、あとあの、茶道と、あとヴァイオリンも、それからえつと……」

『お嬢様、頑張つて』

「はは、相変わらずだねえ西園寺さん。とまあ、見ての通りの人だよ彼女は」

「普段から人見知りする子だとは思ってたけど……なあんか今日は感じ違くない?」

「そ、そんなこと、ない! ……で、です!」

「西園寺さん……だね。うん、覚えた。これからよろしく」

「は、はい! あ、あのあの、こちらこそ、末永く、よろしく……や、その変な意味じゃなくて、あのあの……!」

終始。パニクリっぱなしの彼女を見て、思わず真琴は笑みを浮かべた。転校初日、不安ばかりかと思つたがそれでもなさそうだ。少なくとも、既に三人の友人が出来たではないか。ただ、強いて言うなら真琴にだけ一つ欠けている物があるのだが。

「あ、あの……ま、真琴君は、神姫がお嫌い……なのですか?」

予想外の質問に真琴は思わず面喰ってしまったが、真琴はゆっくりと首を振ってそれを否定する。

「まさか。小さい時から姉さんが目の前で神姫と遊んだりしてたから、むしろ大好きだよ。ただ、ウチにはもう神姫が二人いるから、自分用ってのは無いんだ」

「だ、だったらあの……私たちの部に来ませんか？」

「……部活？」

すると、隣に立つ蓮やねね、そして彼らの神姫も同時に笑みを浮かべる。七海の言葉を継ぐようにして蓮が言葉を挟んだ。

「僕たちが活動している部活、御神楽中学神姫部さ」

「し、神姫部？ 神姫部って、いったい何をするの？」

名前だけではないったい何をするのか予想もつかない。そんな真琴の反応に興味アリと受け取った彼らは頷き合った。

「神姫無いのはちよつと残念だけど……仮入部くらい出来るよねー？」

「まずは見学、どうかな？」

友達の次は入部のお誘い。転入時の不安など何処かへと吹き飛び、今日の前には自分が体験したことのないような世界への入り口が真琴を手招いている。

魅力的な友人たちと、魅力的な神姫で織りなす部活動——未知への想いが真琴を突き

動かした。

「よ、よろしくお願いします！」

じゃあ、善は急げだね——そう言っただねを皮切りに教室を飛び出すと、真琴たちは神姫部の部室であるという理科室へと足早に向かっていた。

## 序章 【中】

校舎の階段を駆け下り、北にある理科棟の最奥に彼ら神姫部の部室である理科室があった。先陣を切るねねが扉を開くと、一人の男性が中央のテーブルで何やら作業をしていた。

「失礼しま……つて、あー！ 先生つてばまたべっこう飴作つてるー！」

「いいのー。これはオレの数少ない趣味の一つなんだから——つてオイ、勝手に食べるんじゃない！ そりや会心の出来の……ああ」

「んまーいから許したげる♪」

爪楊枝に刺さったこげ茶色の小さな飴を頬張るねねはご満悦の様子。反面、会心の出来の飴を奪われた先生はかなり悔しそうな表情を浮かべていた。

「先生、相変わらずねねちゃんには勝てないですね」

「バカ言え。オレが本気出したらコイツの成績を赤点にすることが出来るんだぞ」

「それじゃ職権乱用ですよ」

「んなこた知つてるわ。……で？ お前ら何の用だ？ 今日部活動の日じゃ……お？」

見慣れた部員の中で見つけた見慣れない少年の姿に、眼鏡の奥の瞳がキラリと輝く。  
 「もしかして、新入部員か？」

「はい、うちのクラスに転入してきた一ノ瀬真琴君です。最初は仮入部ってことで」  
 「お、一ノ瀬だつて？」

瞳の光が強さを増し、真琴の方へと顔ごとぐぐつと近づける。ほんのりただよう甘い匂いは件のべっこう飴の所為だろうか。

「い、一ノ瀬です……」

「もしかして、あの戦女神杯優勝者の弟くんか？ はあー、こりやなかなか凄い逸材を連れて来たもんだ」

「でもね先せ——」

「オレは『杜若 カキツバタ 功治 コウジ』。見ての通りの理科担当の教師で神姫部顧問。で、こつちが相棒の『ジヨツシユ』だ」

『よろしく。僕の名前、そのまんま“助手”から取ったものなんだ』

そう言つて彼の手の平に飛び乗つたのは、ねねの持つマオチャオ型とよく似た神姫——犬型MMSのハウリンだった。マオチャオ型が“猫”をモチーフにデザインされたのに対し、ハウリン型は“犬”をモチーフにデザインされている。犬らしくマスターに対し従順で素直であり、老若男女を問わず愛好家が多いというポピュラーな神姫だ。



「それで、真琴君の神姫は？ いやいや皆まで言うな、オレがズバツと当ててやるから。……そうだなあ、その地味な見た目からしてアーンヴアルか？ ……その申し訳なきそんな顔は違うな。あーまてまてまて、分かつてる、分かつてるからそのまま。あれだ、礼儀正しそうな雰囲気からして飛鳥だろう。なに、これも違う？ ということは……あれか、実は巨乳好きでイーアネイラとか？ ま、まさかイーダ型か？ その歳で既に上級者の域に……!？」

「先生つてばー、暴走してないでちゃんと真琴君の話聞いたげてよ」

「その……僕はまだ、自分の神姫を持つてなくて……」

「……ほへ？」

近くて遠い何処かから、砂糖の焦げる香ばしい匂いが漂ってきた。

※

「なるほど、だから今は仮入部でつてわけか……ほい、出来たての飴ちゃん」

爪楊枝にくつついたべっこう飴をかじりながら真琴たちは各々適当な席に座る。ふうんと唸りながら、杜若先生は黒板の前を行ったり来たりしている。恐らく、入部させるか否かを判断しかねているのだと思われる。

手持ち無沙汰になつた真琴は、たまたま向かい側の席に座つていた七海にこつそりと声を掛ける。

「ところで、神姫部って何をするの?」

「ひゃうわ! あ、あの……!」

かなり小さな声で声を掛けたのにも拘らず、彼女の華奢な肩がピクンと大きく跳ねた。もう少し小さい方が良かったかなと思つていたつかの間、蚊の鳴くような声で彼女から返事が来た。

「し、神姫部の主な活動はほ、ほほ、奉仕活動……です」

「奉仕活動? ……えっと、神姫と一緒に掃除したりするってこと?」

こくこくと頷き、そして彼女はそのまま言葉を継いでいく。依然として七海の声は耳の神経を研ぎ澄ませていないと聞き落としてしまいそうなほどに小さい。

「き、今日は居ませんが、私たちの他に一年生や二年生と一緒に校内外の清掃活動をしたり、時々レクリエーションとして近隣の幼稚園や老人ホームで神姫を使った劇などを披露したりし、します……」

「……かなり本格的なんだね」

部活動というより課外授業のような感じだろうか。神姫をフルに生かす活動であるのに対し、神姫を持たぬ自分がこの場においていいのだろうかと思ふける。

「そ、それに加えて、三年生にはもう一つ大きな目標があるんです」

「大きな目標？」

「それはもちろん！ 夏に行われる戦女神杯チームの部に参戦し、優勝することだあッ  
！」

「バアン！ と黒いテーブルは小気味よ過ぎる音を炸裂させ、突然の大きな音に七海と真琴の肩が大きく跳ね上がった。

「ひいッ!？」

「うわあああ!？ せ、先生聞いてたんですか!？」

「つたりめーだ。部活動の内容を教えようと思っていたのに、全部七海ちゃんがやつちまったらじゃねーか」

「ご、ごごごめんなさいい!」

「や、説明の時間が省けて助かった。礼を言っておく。それはさておき……」

顔を上げると、いつの間にか黒板はカラフルなチョークで書かれた雑多な字で埋め尽くされていた。神姫部の、主な活動内容や実績、諸注意など様々だ。字が汚いのを除けば、これだけ見れば概ねを理解できそうである。

「今言つた通りだ。三年生になると……いや、正確に言うとな満十五歳以上でこの戦女神杯——通称、ヴァルキリーカップへの出場権利が得られるんだよ。つてのは、真琴君を

始めここにいる全員知ってるか。概要は……よし、蓮答えてみ」

「はい。——戦女神杯とは、ここ御神楽町が誇る大規模神姫バトル大会のこと。夏季と冬季の二つに分かれて行われ、夏季はチーム戦、そして冬季は個人戦となります」

「教科書ばりな正確さだ、サンキュ。そして真琴君の姉上が有名なのは、後者である個人戦の方だな。さてそこを……ねね、飴の恨みだお前が答えい」

未だ根に持っていたらしい。存外子供っぽい先生である。

「えー、ワタシー？ ……しよーがないなー。えっと、夏のチーム戦は優勝してもトロフィーと商品が出るだけなんだけど、冬の大会は神姫バトルで一番凄い、F大会へのシード権が得られるん……だったっけ？」

「なかなか分かってるじゃないか、その通り。真琴君の姉上である一ノ瀬風花は、この冬季大会を三連覇している猛者だ。初回はともかく、去年のFバトルは準優勝手前までほとんど無傷で勝ち上がったっていったんだ」

「……まあ、そこでストラーフmkⅡ型の人に負けちゃったんだけど」

真琴の余計な一言により、場の空気が一瞬にして沈みかける。杜若先生の咳払いで辛うじて免れたが、関係者である真琴はやや落ち込んでいる様子。

「それにしたって、彼女は我が町で誇れる人物に違いないのさ。今年のF大会も期待してるって伝えてくれ。……お？ 話が脱線しちゃったな。とにかく、うちの部のことは

分かったか？ ざつくばらんに言えば、神姫と一緒に奉仕活動して、そして最終的に戦女神杯、夏季チームの部の優勝を狙う。そんな感じさ」

「でも……やっぱ、神姫の無い僕じゃ……」

彼らには全員、一年生や二年生も含め自分用の神姫がある。神姫ありきの部活動なのに、神姫を持たない自分がいてもいいのだろうか。

「まーなんだ、そこは気にしなくてもいいさ。現に君と同じように神姫を持たない部員だつて多少はいるし。ウチの部は、神姫が好きなら誰でもウエルカムさ」

「ほ、ホントですか？」

真琴の表情に光が差す。小さな躊躇いは、杜若先生の言葉と微笑であつという間にかき消されてしまった。周りの友人も、それを祝福するかのように笑顔を浮かべていた。

「んじゃ、これで正式に入部つてことだねー」

「これからまたよろしく、真琴君」

「わ、わわっわ、分らないことがあつたら、わ、わわた、私が教え——」

『もちろん、アタシ達だつてサポートするわ』

『私に出来ることであれば、お嬢様共々サポート致します』

『これからよろしくねー、真琴くん』

新たに出来た友人、そして個性豊かな神姫たちに見守られながら——真琴はこの日、

御神楽中学神姫部に正式に入部と相成った。

## 序章 【下】

「ただいま……あれ？」

真琴が学校から帰ってきてみると、玄関に見慣れないブーツが転がっているのを見た。ライトブラウンに何処となく丸みのある意匠からして女性物。母親はブーツを嫌うので違う。となると、この一ノ瀬家でブーツを履くのは自ずと彼女に限定される。

「ああ、お帰り真琴」

真琴の帰りに気付いて、リビングの戸口から母が顔を覗かせる。何故か、少しだけ汗をかいているように見えるのは気のせいだろうか。

「もしかして姉さん……帰ってきてるの？」

「ついさつきね。何の連絡も超越さないもんだから、お母さんビックリしちゃって。今ご飯作ってるから、先にお風呂入っちゃって頂戴」

「はい」

それだけ伝えると、ぱたぱたと忙しない音を立てながらリビングの奥へと姿を消してしまった。恐らく、突然の姉の帰宅に夕飯を奮発している物と予測される。去年も、確かこんな光景を見たような覚えがある。小さく微笑して、真琴は一度二階の自室へと戻

り着替えを抱えてから脱衣所へと向かう。やや大きめの湯船に浸かると、溜まっていた疲れが全身からすると抜け落ちていくような気がした。

「転校初日から色々あったけど……うん、皆優しいし楽しくやっていけそうかな」

明日からの登校が楽しみに思えるのは大いに良いことである。

そうしてぼんやりと物思いにふけていると、不意に脱衣所の方からカタン、と小さな物音が聞こえてきた。

「……母さん？」

うっかり忘れたバスタオルでも届けに来てくれたのだろうか。しかし家族とはいえ十代ともなると裸を見せるのはかなり恥ずかしい。少しだけ戸を開けて様子を見ようかと手を伸ばしたその時——脱衣所へと続く扉に大きな黒い影が立ちはだかった。

「……………」

リビングの方角から「あー、今真琴入ってるから後にしなさいよー」と母の声。それが聞こえた時点で、あまりにも遅すぎたのだった。浴室へと至る扉が爆音に近い音を響かせながら乱暴に開かれ、その先で全裸で跳躍する——姉の姿があった。

「会いたかったぞお、真琴おおおッ！」

「うわあああああああああ!?!」

天井まで水浸しにしてしまうほどの水柱を作り上げながら、『<sup>イチノセ</sup>一ノ瀬 <sup>フウカ</sup>風花』は、真琴



の浸かる湯船にダイレクトアタックを仕掛ける。やや大きめとは言ったが、それはあくまで一人で入浴するに際しての話であつて、真琴と風花の二人が入つてしまえば否が応でも密着状態になつてしまう。

「ね、ねねね姉さん!? いや、あの、とりあえず僕先にぐえあ!」

「なーに言つてんだ。せつかく帰つてきたのに弟と風呂も一緒に入らんでどうする?」

「むむ、胸が、胸が当たつてる! というか、くつつくな……ああ!? ど、何処触つた今!?」

「姉と弟の愛あるスキンシップつてヤツじゃないか。ついでにこのままベッド……行く?」

「いい、行くもんか!」

姉の滑らかな腕をすり抜け脱衣所へ一目散。風呂上り（+アルファ）で火照つた体をタオルで強引に巻きつけ出ようとした——その先で、小さな人影が真琴の目に留まつた。

「ま、マリアヴェル……!?!」

『うふふふ、お久しぶりですわねえ真琴サン?』

真琴の前に立ちはだかったのは姉の神姫である、赤くりペイントされた特別仕様のマリーセレス型神姫『マリアヴェル』だった。風花と共に戦女神杯を勝ち抜き、Fバトル

へと導き——そして姉と同様に真琴を狙うもう一人の女性である。

「その……出来れば、退いてくれると嬉しいんだけど」

『マスタ<sup>風花</sup>ーの言いつけで、ここを死守せよと仰せつかつてるんですけどお……真琴サンの誠意次第じゃ、お通ししてあげてもいいですよお?』

「せ、誠意って……」

テンタクルス型の名の通り、マウントされたドレスのような外部装甲がうねうねと奇妙に動いている。マリアヴェルの赤い瞳が細まると無邪気に微笑む。それこそ吸血鬼——いや、まるで淫魔かのような妖艶さが漂っている。両手の指でちよんちよんと恥じらう仕草を見せつつ、その足は着実に真琴へと向かっている。

『もつちろん、真琴サンの貞操を……ワタクシに捧げてくれたら……ですう』

「そうは問屋が核爆発よ、マリアヴェルッ!」

「うわあッ! 姉さん!?!」

すっかりお風呂上りの風花は持ち前のスタイルの良さ十入浴による血行促進効果が加わり、目のやりどころに困る姿に真琴は完全に直視できなくなってしまった。

「マリアヴェル、命令よ。真琴の足をスタンガンで撃ちなさい。そしてそのまま風呂に引きずり込むのよ!」

『スタンガンのアイディアまでは従いますけどお、そこから先はワタクシと真琴サンと

で一緒に添い遂げるんですう！』

「却下よー！」

『だが断るです！』

ジリジリと距離を詰め合う風花とマリアヴェルに挟まれ、真琴は人生で何度目かの絶体絶命の危機に陥る。

「た、たす……け……け……」

この瞬間、真琴は風呂場の白い湯気が走馬灯へと変わるのを垣間見た。

※

「ありがとねえ、アイリス。おかげで真琴が命拾いしたわ」

『当然のことをしたまです、悠子様』

悠子が出来上がった食事をテーブルへと運ぶと、その先で待機していた白い神姫がそれを受け取り丁寧に並べていく。天使コマンド型ウエルクストラ『アイリス』。彼女は真琴の母である『一ノ瀬<sup>イチノセ</sup>悠子<sup>ユウコ</sup>』の神姫であり、この家に最初にやってきた神姫で真琴も風花も、もちろん両者の父からも信頼されている頼もしい存在である。

「ホントに助かったよアイリス。相変わらず、姉さんの暴走には困ったもので……」

両者が飛び交う瞬間に響いた発砲音。騒ぎを聞きつけたアイリスに風花とマリアヴェルはあつさり鎮圧（やや大げさな表現かもしれない）され、今は二人とも脱衣所でひっそり返っている。

「姉さん、風邪とか引かなきゃいいけど」

『私が記憶している限り、風花様は現在に至るまで健康体です。風邪など、その片鱗すら見たこともありません』

「……そうだっけね」

小、中、高、大——その全てで皆勤賞を取っているのは伊達ではないということか。武装を解除し、再び食器を並べる作業に戻ったアイリスの頭を、真琴はそつと指で撫でてあげた。

「いつもお世話になりっぱなしでごめんね、アイリス」

『……………いえ、私も内心穏やかではなかったのです』

「え、何か言った？」

『お気になさらず。それより、お姉さんがご帰還のようですよ』

ふらふらと覚束ない足取りなのは湯あたりの所為かそれともアイリスに撃たれた所為か。風花とマリアヴェルは揃って食卓に着き、ぐてーんと体を突っ伏してしまった。

「アイリスったら酷いわ。私、まだ何も悪いことしてないのに」

『量産型の癖に生意気な……次やったらスクラップにしてやる』

「そんなこと私が許さないわよ。ほら、皆食事にしましよ。ヂェリカンも用意してあるから、マリアヴェルもアイリスもどうぞ」

『わーい。ママ大好きですう』

ヂェリカンとは神姫用添加剤『ヂェリー』のことで、いわば神姫たちにとつてのおやつ、あるいは食事とほぼ同義のものである。神姫はバッテリー駆動なので必ずしも必要というわけではないが、神姫のメンテナンスをかねて愛用したり、またそれらを好む神姫たちも多いのである。悠子が渡したのはオイルヂェリーで、人間で言うところの栄養ドリンクに近いものだ。

「それにしても、また唐突に帰って来たね姉さん。前に帰ってきたのは……F大会の前日だっけ？」

「そうねえ……あの日は熱い夜だったのを覚えてるわ……真琴」

トリップしてる姉を相手にするとロクなことが無いのでスルー。

「……それで、何で帰って来たの？ また食費が尽きたとか？」

「しっふれひへー、んぐ、ん。私はそんなズボラな人間じゃないわよ。我が愛する弟ながら冷たいわね……もふもぶ」

生春巻きをもごもごさせる敬愛すべき(?)姉。真琴を優に超える長身で、傍から見

ればモデルやタレントといつても遜色ないのに、中身は弟を愛し過ぎている（性的な意味も含め）ブルコンで放浪癖持ちである。ただ、別に真琴としては姉は嫌いではないし、むしろ美人で自慢も出来るのだが……さすがに過度なスキンシップは遠慮していただきたい。

「今日はねえ、愛すべき弟にプレゼントがあるのよ」

「……去年の誕生日プレゼントに、あまりにもえげつなくて他人には口が裂けても言えないようなプレゼントをした姉さんが？」

「んー？ 去年はエロ本（姉萌え）だっけ？」

「母親の前で言わないよね普通！」

しかし、当の母親はけらけらと笑っているだけで一切言及しない。アイリスが武器を構えているが、それを遮るかのようにマリアヴェルが仁王立ちしている。食卓の上だというのに、妙に緊迫している。

「っはっはっは！ 一冊じゃ足りないって？ 三冊エロイの欲しいってか？ いやしんぼめ〜」

「…………ちそうさまッ！」

完全に姉に遊ばれてる。流石にここまで来ると呆れを通り越して怒りたくもなる。使い終わった食器を片づけりビングを出ようとした真琴の背中に、風花の謝罪の言葉が

投げかけられた。

「ごめんごめん。今回はちゃんとしたモノだよ。ゼツタイ、真琴喜ぶと思うからさ！」  
「……………」

ジト目で返したのだが、何故か風花は少し頬を赤らめている。

「あとで……………うん、今すぐお姉ちゃんの部屋に行つて待つて。……………そんな怖い顔しないですてば。変なコトしな……………い、うん、絶対しないから、ほらほら」

「よだれが垂れてる」

「こ、これは心の涙よ。真琴に信用されなくてお姉ちゃん寂しい〜みたいなの？」

「……………はあ。わかったよ」

ここまで言われて拒否すると本気で姉が泣きだす可能性が出るので、真琴は澁々といった面持ちで階段を上つていった。上り終えて突き当たりには今は出張中の父親の部屋があり、反対側に真琴と風花の部屋が隣り合わせになっている。【HUKA】のネームプレートの前には立つと、真琴の肩に何かがポンと乗った。

「あれ、アイリス？」

『護衛のために付き添うべきと、判断しました』

「……………何かあつたら、頼むよ」

ちなみに、このネームプレートの下には真琴と風花の相合傘の落書きが残っている。

……書いたのは、言うまでもなく風花だ。

一度気を取り直し、ドアノブを握りしめて回す。鍵は掛かっついていなかった。点けつばなしの電灯の明かりに照らされた姉の部屋は——予想以上に片付いていた。というのも、風花はほとんどこの部屋を使っついていなく、定期的に悠子とアイリスが掃除しているのだから当たり前である。なお、風花健在の場合はゴミ屋敷と化す。

不意に背後から気配を感じ屈むと、真琴の頭上を風花の両腕が空を切る。

「おまたせえ真琴！　つて、何も避けなくてもいいでしょー！」

「で、プレゼントって何なの？」

「そりゃここまで来ればもちろん……わ・た・し？」

『先日悠子様ご購入した暴徒鎮圧用のパイルバンカーが早速役に立ちそうです。真琴様、指示さえあればいつでも打ちますが』

「もー……いいから。部屋戻る」

「ま、ままたつた！　冗談はこれでお終い！　だからさ、ちよつと待つててよー」

流星にパイルバンカーの一撃は避けたいらしく、焦燥し切った姉は慌てて部屋の中へと飛び込み真琴へのプレゼントを探し始める。……とところで暴徒鎮圧用のパイルバンカーとは、どうか母は一体何を考えてパイルバンカーなど購入したのだろうか。むしろそのの方が気になるのだが。



「真琴、こっつちおいで」

プレゼントを探していたはずの姉は、何故かPCの電源を付け回転椅子に腰を下ろしていた。嫌な予感が脳裏をよぎったが、肩に乗っていたアイリスの『あ……』という呟きに気付き彼女の視線を追いかけた。

ノートパソコンの隣に、およそ三十センチ四方の赤い箱が置いてある。美しいイラストの端に施された、MMSのロゴデザイン。それが意味することに感づき、真琴は風花へと視線を移す。

「も、もしかして……これ！」

「うん、私からのプレゼント。真琴のための神姫だよ」

開けてごらんと促され真琴は赤い箱に手を伸ばす。外側を開くと、深紅色のボディに身を包んだ少女が静かに眠っている。パッケージには、ハイスピードトライク型MMSアークと記されている。バイクへの変形ギミックを持つ、とてもスポーティな神姫だ。

「で、でも……いったい幾らしたのさ。そんな、気軽に買えるようなものじゃ……」

「真琴だつて神姫に憧れてたんだから、細かいことは気にしなくていいの。ほら、名前とか色々決めるから、一緒にやるよ」

「う、うん……！」

思わず声が上がってしまったが、真琴は受け取った神姫を丁寧に取り出すと、USB

ケーブルでPCと接続。接続と同時に神姫ネットのロゴが表示され、そのまま設定画面へとスムーズに移行した。神姫のコアであるCSC（コアセットアップチップ）の基本設定、他ユニットごとの設定に加え、名称を設定する項目もある。CSCは姉の説明を聞きながら調整を施し、他ユニットも同様に姉のアドバイスを従い設定していく。一番最後の項目、名称に辿り着いた時、真琴は自分の神姫の名前を考えていないことに気付いた。

「何か、好きな名前とかないの？ 無いならお姉ちゃんの名前にする？」

「……毎朝地獄になるからやめてほしい」

「そりやどいう意味だ、このっこのっ」

一通りの設定を終え、残すところ神姫の名前だけなのだが……これがなかなか決まらない。所謂、真琴はゲームの主人公や武器の名前に拘るタイプだ。

「そういうえば、姉さんの神姫の『リアヴェル』って名前は何か由来とかあるの？」

「んー、今思い出すとちよつと恥ずかしいけど……あるよ。リアヴェルって名前ね、私の好きなゲームのキャラクターの名前なんだよ。吸血鬼のキャラクターでね」

「へえ……知らなかったよ」

「この子も、もつとシンプルな名前がいいんじゃない？ 凝った名前もいいけど、シンプルなのも素敵じゃない」

無垢な、とても優しいちゃんとした「姉」の笑顔。間近で見ると想像以上に綺麗で、同じ家族なのに少々ドギマギしてしまう。

「なあに赤くなってるの。もしかして、いよいよ私に惚れた？ 可愛いなあコイツう！」

「……「赤」か」

不意に閃いた、とてもシンプルな名前。ほんの少しの気恥ずかしさを堪え、真琴は思いついた名前をキーボードで打ち込んでいく。

「……ふむ、それでいいのね？」

「うん。それじゃ……いいかな？」

「もちろん。真琴の神姫だから、どうぞ？」

最終決定項目。修正箇所などはないかという丁寧なアドバイスの後、真琴はエンターキーを押しこむ。入力した情報はケーブルを伝わり、アーク型神姫へと流れ込んでいく。演算、そして処理を終えると、その瞳に小さな光が灯る。

『——セットアップ完了。ハイスピードドライク型アーク、起動します』

情報を読み込んだ神姫がゆっくりとその小さな体を起こす。真琴の人生で初めて、神姫の持ち主<sup>マスター</sup>となった瞬間。胸の奥底からこみ上げてくる感動に、僅かに手が震える。まるで壊れ物でも扱うかのようにそっと手を伸ばし、真琴は神姫の名前を呼んだ。

「は、初めまして。今日から君の——『ガーネット』のマスターになる、真琴って言いま

す

『……それが君の名前か。良い名前だね、マスター』

全ての情報をインストールし、無事起動した真琴の神姫——ガーネットは真琴を見上げた。

「こ、これからよろしく……」

『ちよつと堅そうなマスターだけど……ま、悪くはないかな。こちらこそ、よろしく頼むよ』

転入、友人に部活に、そして自分だけの神姫。

その日は真琴にとって、まるで自分を取り巻く世界中から祝福されているかのような素晴らしい一日となった。

## 第一章 【ビギナーズ・ラック】

## 第一章 第1話

目を覚ましたアイリスは、内蔵された時計の時刻を確かめるとゆっくりと体を起こす。

時刻は六時ちょうど。数秒の狂いもなく目覚め、早速マスターである悠子のサポートへと向かう。リビングに居た悠子も起きたばかりなのか髪が見事に乱れており、一切櫛で梳かしていないのが丸分りだった。

アイリスは愛用の櫛を抱え跳躍——悠子の正面に華麗に着地すると定例である朝の挨拶をする。

『おはようございます、悠子様』

「おはようアイリス。って、今日は梳かしてもらわなくていいわよお。特に出かける予定もないし」

『同じ女性として、身だしなみは整えるべきかと』

「もう、ませちゃって」

『神姫に“ませる”という表現は適切でしょうか？』

「家族には適切よ」

自分で髪を梳くのも好きなのだが、彼女にやつてもらうのも同じくらいに好きな悠子はそのまま黙ってアイリスの櫛に身を委ねる。丁寧にセットしてもらった後は、真琴と風花の朝食作りに取り掛からなくてはならない。風花はともかく、真琴は今日も学校である。

一人では手間のかかる調理も神姫と一緒にだとずいぶん捗る。アイリスのお陰で朝食のメニューに二品ほど追加出来て彩りも前に比べれば華やかになった。

人間をサポートする「神姫」が世に一回つてから既に数年、神姫技術の発展は目覚ましく、時には警備会社の新たななるユニットとして、医療の最前線では人間には出来ない綿密な作業を担ったりと、もはやホビーの領域を既に越えた万能の存在となりつつあった。とはいえ、アイリスはごく一般的な神姫なので、時々失敗する時もある。今でこそ失敗は減ったが、最初は人間らしくて可愛いと、謝るアイリスに対し悠子は常に微笑んでいた。

朝食の支度を済ませ、時刻は七時三十分過ぎ。そろそろ真琴が起きてくるはずなのだが……今日は何故か起きてこない。もうすぐ高校生になるのにまだまだ子供かしら。

「アイリス、お願いしてもいい？」

寝坊した真琴を起こすのは専らアイリスの役割だ。素直に頷いて二階へ向かうかと

思ったのに、何故かアイリスは首を横に振った。マスターの命令を拒否するなんて珍しい——そう思った悠子に、アイリスは言った。

『いえ、その必要はありません』

「え、どうして……?」

『マスターあ! 何寝坊してるんだよ!』

「だ、だつてガーネットが目覚まし時計壊しちゃうから!」

『軟弱な目覚まし時計を持つてるマスターが悪い! 今日私のデビュー日だつてのに、どうして寝坊したの!』

「だからって何も目覚まし時計に本気で殴りかからなくても……つてああ! 時間時間!」

ドタドタと階段を駆け降りる音が過ぎ、乱れた制服に身を包む我が子に悠子は度肝を抜かれた。

「ちよ、ちよつとちよつと。朝ご飯はちゃんと食べていきなさいよ?」

「え、いやうんと……味噌汁だけ!」

『ダメだマスター! どうせ食うなら肉だよ肉! そんなんじや勝てない!』

「何と戦うつていうのさ!?! つと、とにかく行ってきます!」

慌てふためく真琴は強引に味噌汁を流し込むと、最低限の身だしなみだけ整えて玄関

を飛び出していった。呆気にとられた悠子はアイリスにそつと訊ねた。

「はあ、驚いた。あの赤い子が真琴の神姫なのね？」

『はい。アーク型神姫、ガーネットと』

「真琴もこれで神姫のマスターか……ふふ、寂しくない？ アイリスさん？」

『……………』

悠子としては少々からかったつもりだったのだが、当のアイリスは予想以上に落ち込んでいる様子だった。普段からあまり表情を表に出さないのだが、真琴の事となると少々事情が違ってくる。

『やはり、量産機は地味でしょうか…………』

「私は可愛いと思うけど…………あらら。結構本気で気にしてるのね」

『…………いえ、何でもありません』

「そういえば、あの事はもう忘れちゃった？」

『あの事…………とは？』

小さく首を傾ぐアイリスの頬を指で撫でながら、悠子は微笑んだ。

「ずっと前の事よ。昔、真琴があなたと一緒に神姫売り場に行った時のこと」

『…………ええ、確認しました』

「あの時、あなたと同じウェルクストラ型の神姫を持った子とぶつかったじゃない



い？ 風花はどっちがどっちだかわかんなくなっちゃって半べそかいてたけど……真琴はどうだった？」

『……………』

記憶を呼び起こし、思い出す。

あの時、ぶつかつた衝撃で一時的に機能がダウンしてしまい、声を発することが出来なかつた。ぶつかつた当人も風花も分からなくなつてしまつたその時、真琴だけはアイリスをハッキリと認識していたのだ。

帰りに、迷わず自分を選んでくれたことを訊ねたら彼は――

『……………すみません悠子様。らしくありませんでした』

「いいのよ別に。さて、それじゃお掃除でもしましょうか？」

家族を間違えるわけがないと、舌つたらずな言葉でそう言つてくれたのだ。

※

ガーネットとの初登校は遅刻ギリギリではあつたが、その後の授業は滞りなく参加しそして放課後。

いよいよ待ちに待つた神姫部での活動日。蓮とねね、そして七海と一緒に部室である理科室へと向かう。部室には既に数名の部員たちが揃つていた。

「お、来たな。そいじゃ改めての自己紹介をして……………だな。早速今日から三年生には神

姫バトルの訓練をやってもらうとするぞ」

「え……あの、いきなりなんですか？」

「真琴君は神姫バトル未経験者だし、まずは神姫バトルに慣れてもらわないと困るからな」

「神姫バトル……」

テーブルの上に立つ神姫——ガーネットへと視線を向ける。自信満々とも言うべきか、彼女は勝気な瞳をまっすぐ真琴へと返していた。

『ふうん、神姫バトル……ね。安心していいよマスター。何てったって私はアーク型神姫だからね。スピードで圧倒して余裕で勝利を掴んでやるよ』

「と言つても、神姫の性能が良くても真琴君が慣れてなきやどうしようもないのさ」

真琴は杜若と共に教室の後ろ側へと移動し、テーブルの端に用意されたヴィジュアライザーの付近に立つ。真琴の手の平の上にはガーネットが腕組みしながら構えていた。

「まずは模擬戦を見学してもらって、それから練習がてら実際に動いてもらうか。んじゃ……ねねと蓮、用意してくれ」

呼ばれた兩名が向かい合って立ち、彼らの神姫がその間で同じように向かい合って構える。現時点で武器は構えていない。両者とも素体のままだ。

「模擬戦……でも、負けは譲れないね」

「お手柔らかに頼むよ。僕だつて負ける気はないけど」

『いよーし、気合い入れてくよー』

『間延びした声で言われるとちよつと緩むね……ま、新入りにちよつとイイトコ見せようじゃないか』

両者が構えたのを確認して杜若先生がヴィジュアライザーに手を伸ばす。

「時間は三分間。いつものルールで。せいじゃ、ヴィジュアライザー起動するぞ」

先生の合図に合わせ二人が左腕を構える。腕には神姫バトル専用の支援デバイス——  
ライドオンギア  
 — R・O・G が装着されていた。

「ライドオン！」

声と同時に、まずヴィジュアライザーが神姫バトル用の疑似空間を作りだし、そしてニニ、ハヤテの両名が淡い光に包まれていく。光が消えると同時に、二人は戦闘用の武装を装着していた。

ねねの神姫——ニニの両腕には大型の爪が装備されている。マオチャオ型の近接戦闘スタイルにマッチした近接戦闘用の武器。それ以外の装備は、腰にマウントされたハンドガン以外特に見当たらない。

対する蓮の神姫——エウ克蘭テ型のハヤテは背部の翼を展開していた。その手にはハンドガンと片手剣を装備、空戦を想定された軽装だ。

そして戦闘ステージはこの理科室と酷似したフィールドとなっている。テーブルの位置や窓際に配置された水槽や試験管など細部までしっかり再現されている。このまま授業も出来そうなほどにリアルである。

『マスター、そつちに見惚れてどうするの!』

「わ、ゴメン」

ガーネットに促されてハツとなり、今一度意識をバトルへと向ける。

黒いテーブルの上で、両者の神姫がにらみ合いを繰り返している。攻め込む瞬間を見計らっているのだろう。蓮のハヤテは慎重にハンドガンの銃口を二ニに向け、そして二ニは——何故か小刻みに震えていた。

『むう……もー! 我慢にやらーん!?!』

『またそうやって突っ込んでくるのかい! 相変わらず単純だね!』

猫型らしくあまり気の長い性質ではないのだろうか。先に痺れを切らした二ニが一直線に駆け出す。ハヤテはそれを冷静に、というより慣れた様子で応戦していた。ハンドガンが乾いた発砲音を響かせると弾丸が放たれる。回避に転じるのかと思いきや、二ニは両腕の爪で弾丸を弾いていた。

「それにしても、ねねちゃんの二ニは反射神経が凄いやねッ」

「当然でしょ! そのまま突っ込んで、思い切り引っ掻いちゃえ、二ニ!」

『あいあいさー!』

弾丸を弾く様も圧巻だが、その突進速度も並外れたものではなかった。その速度は人間が全力で走るよりも速く、ニニはあつという間にハヤテとの距離を詰めると両腕を大きく振りかぶる。爪による一閃は——ハヤテの影だけを切り裂きテーブルに大きな傷痕を残した。

『危ない危ない。空に逃げて正解だったね』

「んなー、もう! ずるい! 蓮、飛ぶの禁止!」

「それじゃ翼がただの飾りになっちゃうじゃないか」

悠々とニニの上空を浮遊するハヤテにマスター共々抗議が始まる。そんな言葉はどこ吹く風。ハヤテは大きく旋回しながらハンドガンを乱射した。

『そら、そらッ』

『ね、ねねえ! どうしよう!』

「……大丈夫、ワタシに合わせて」

弾丸を弾けるのにも拘らず、ニニはハヤテから逃げるようにして距離を取る。だがハヤテの飛行速度も速く、程なくしてニニの背後に強烈な踵落としをお見舞いした。

『んにゃあッ!』

「よし、追撃だ!」

『了解、マスター!』

二二の体勢の崩れたところにハンドガンで追い打ちを仕掛ける。弾丸が吠えテープルが爆ぜて煙が立ち込める。二二のマスターではないのに、真琴は心配で堪らなくなってきた。

『落ち着きなよ、マスター。心拍数が凄いいことになつてる』

「いや、だつて」

『よく見る。まだ勝負は終わつちやいない……ここで決まるよ』

白煙が立ち込め二二の姿は見当たらない。ハヤテは警戒態勢を維持したまま煙の向こうを見据えている。そして次の瞬間——白煙の奥底から二二が大きく跳躍。ハヤテよりも高高度を取ると、落下の勢いを乗せながら両腕を振り下ろした。

『にやあああああッ!!』

『また同じ手を——ッ!』

爪と片手剣とがぶつかろうとしたその刹那——校内放送のアナウンスがスピーカーからノイズ混じりで響いた。

「杜若先生、杜若先生。至急、職員室までお戻りください。繰り返します——」

校内放送を合図に、ヴィジュアライザーの電源が落とされ疑似フィールドが消滅していく。互いが肉薄しようとした瞬間に武装も解除されてしまい、二二とハヤテは真正面

から派手に衝突してバトル終了となった。

「わ、悪い二人とも！ 今日職員会議があつたのをすっかり忘れてて……」

「ええ!? じゃあ、僕の模擬戦はどうなるんですか?」

「いや……その……つとそうだ。諸君、明日は何曜日だ?」

「えつと、土曜日ですけど」

「そうだ。つまり休みだ! ということでお前ら四人で神姫センターに行つてこい!」

「神姫センター……ですか?」

苦し紛れの提案ではあつたが、杜若は何の考えも無しに言つたわけではなかつた。

「どの道神姫センターには行かなきゃいかんのよ。真琴君のR.O.GのIDを登録しなきゃいけないしな。その他諸々も含め、お前らで神姫センターで練習してこい! これ  
は先生からの課題とする!」

やや強引な気もしないではなかつたが、真琴は特に不服に思うでもなく素直に頷いてくれた。他数名も同様だった。素直な生徒たちで大いに結構。内心、冷や汗を浮かべてはいたのだが。

「むー! じゃあ蓮、決着は神姫センターでやるからね! 逃げないでよ?」

『二二も、このままじゃしよーかふりよーだよ!』

「もちろん受けて立つよ。引き分けのまま引きずりたくないしね」

『ふふん、明日が楽しみだ』

『なんだ、結局私の出番は無しかあ。初バトル楽しみにしてたのに』

「仕方ないよ。でも、神姫センターか……そういえば最近行ってないなあ」

「あ、あのあの……それじゃ、明日の打ち合わせをその……えっと、集合場所とか、時間とかを……」

その後の話し合いの結果、明日の午後一時に神姫センター前に集合という話になった。その後、真琴は下級生たちと他愛の無い話をしてから奉仕活動の一環である清掃活動に参加して帰路に着いた。

『明日が待ち遠しいね、マスター』

人生初の出来事の連続だが、不思議と真琴は疲れを感じなかった。神姫と一緒にいたから、なのだろうか。



## 第一章 第2話

真琴たちが住む御神楽町の中心、町を横断するリニアモーターカーの駅のすぐ傍に『御神楽町神姫センター』はある。

神姫センターとは神姫の武装やメンテナンス、衣服やアクセサリーの全般を取り扱う大型施設の総称のことで、地方によつて多少の差異はあるが基本的にはどこの神姫センターもその役割は同じである。

御神楽町神姫センターの外観は一般的な大型百貨店とほとんど相違ない。全三階建の建物で、一階には神姫の武装や防具を取り扱うショップやサポートセンター、二階は神姫専用のエステショップに休憩所を兼ねた喫茶店などが軒を連ねており、最上階は神姫バトル専用の大型フロアとなっている。

「何だか久々に来た気分だよ。前に来たのって……いつだったかなあ」

『活気があつていいね。なんかこう、血が騒いでくる感じだよ』

「……今日は練習なんだから、そんなに派手には戦えないと思うよ？」

建物内部中央にある噴水広場が真琴たちの集合場所となっている。時間には少々厳しい真琴は約束の時刻よりも十分も早く到着していた。前日、やや興奮気味で眠れな

かったというのもあるが、やはり自分が一番楽しんでいるからだろう。何せ人生初の神姫バトルを経験できる日だ。テレビや姉の後ろで見えていたのとは違う、今度は自身身がマスターとなつて指示を出して戦える。今まで出来なかつた事に手を伸ばす未知への期待というものは、想像以上に心を震わしてくれる。

『にしても皆遅過ぎじゃない？ いや、私たちが速過ぎたんだね。まー、そりゃ私つてば最速の神姫だししようがないかあ』

「たしかにちよつと早過ぎたかも。……それとも、集合場所を間違えてるとか」

「お、お待たせしてすいませ〜ん!!」

正面の自動ドアから息を切らせて現れたのは七海だった。藍色のワンピースと白くつばの広い帽子がとても可愛らしかった。深窓の令嬢、といえれば分かりやすいだろうか。実際、彼女は西園寺財閥の一人娘で真正正銘のお嬢様らしい。先日の帰り道に蓮から聞いたばかりだ。

「あの、その……ごめんなさい。服選ぶのに時間掛かつちやつて……」

「いいよ全然。僕もガーネットも大して待つてないから。ね？」

『服だあ？ 今日神姫バトルの練習だろ？ そんなもん気にしてる場合じゃないだろ』

『もちろん淑<sup>レ</sup>女<sup>デ</sup>としての嗜みにございます。本日の衣装、お嬢様も少々気合いを入れ

て厳選したんですよ?』

「ぶ、プリユイー! あ、恥ずかしいから、そ、そういうのはあの……」

「へえ、そうなんだ。似合ってるね、西園寺さん」

「ひえツ!? あ、あの、あのあのその……は、はう……あ」

それは真琴の何気ない感想だったのだが、受け取った本人はというと頭から湯気が出そうなほど頬を真っ赤に染めて俯いてしまった。

『……なるほど。お嬢様の目に狂いは無いようですね』

『ああん? いったい何の話だ?』

「それにしても皆遅いね。西園寺さん、待ち合わせ場所はここでもいいんだよね?」

「は……は、はい。私も昨日ねねちゃんにメールして確認もしましたし……」

「お〜い! ごめ〜ん!!」

先刻の七海と同じように、自動ドアの向こうから蓮とねねが走ってくる。額に汗を浮かべているのを見れば相当に急いでいたのが一目で分かる。

「いやあ、遅くなってごめん。僕の自転車がパンクしたり、ねねちゃんが寝坊したりして散々だったもので……」

「やはは……めんぼくない」

『これで全員揃ったな、マスター』

「うん。じゃあ、三階に行けばいいんだよね？」

エスカレーターを乗り継ぎ最上階へと辿り着いた瞬間——割れんばかりの歓声が真琴たちを盛大に迎えた。

「へ、これが……」

正面、フロア中心部に特設された大型ヴィジュアライザーの中で飛び交う二つの光が見える。神姫だ。その身を武装に包み、マスターの勝利のためにぶつかり合う小さな戦士達。真琴はいつか見た姉の後ろ姿を思い出す。戦いに赴くマスターもまた戦士だ。そして今、真琴もその道を辿ろうとしている。

「へえ、何か凄い盛り上がりがあるじゃん。今日って何かイベントあったっけ？」

「エキシビジョンマッチって書いてあるね。……うわ、すごいな。青サイドの人23連勝もしてる」

『水城祐樹……だって。蓮、聞いたことある？』

「聞いたことないなあ……」

『そーんなことより、今日はハヤテと決着付けるの！ ついでに、真琴クンの練習も！』

「え、僕はついでなの……？」

エキシビジョンマッチの行方も気になるが、今日は観戦に来たのではなく真琴とガーネットのために神姫バトルの練習をするのだ。ラウンジを右に進んでルーキーエリア

と区分された場所に向かう。大会申請やID登録もこちらで行うらしい。蓮に横で説明されながら、受付のお姉さんと共にROGの登録をしていく。

「……はい、登録完了いたしました。以後はROGを提示していただければこちらのフロアを使用することが出来ます。他、何か質問などはございますか？」

その後、簡単な諸注意を受けてからルーキーエリアへと向かう。ルーキーエリアとは名の通り神姫バトルを始めたばかりの人が集まる場所で、全体的に真琴と近い年くらいか、或いはもつと年下の子供の姿も見受けられる。神姫に推奨年齢こそあれど実際に小学生が神姫を持つケースも少なくないらしい。簡易的な保護者のような形になるのだろうか。

「まっこと〜！ こっちこっち！」

バトル用ヴィジュアルライザーの前で手招きするねねの姿を見つけ走る真琴と蓮。既に彼女は準備万端らしく、相棒の神姫も既に定位置にスタンバイしていた。

「せいじや、まず昨日の模擬戦の続きね！」

『リベンジするぞおー！』

「ねねちゃん、今日ココに来た目的は？」

「蓮と決着付ける！」

「……ごめん真琴君。練習は少し時間掛かりそうだ」

「う、うん……」

ねねは右腕をぶんぶん振り回し気合い十分と言った様子。二二も同様で、シャドウボクシングらしき動きを見せている。蓮とハヤテはやれやれといった面持ちで準備をしていた。

「あ、あ……あの……」

「え？」

二人の戦いを見学しようと横にあつたベンチに腰掛けた時、不意に横から七海に声を掛けられ真琴が顔を上げると、彼女は隣にあるヴィジュアライザーを指差していた。

「あ、あつちのヴィジュアライザー空いているみたいですので、その……よ、よかったら、私と……これ、練習しませんか？」

『お、そりや良いね！ 私も早く体動かしたくてウズウズしてたところなんだ』

「二人とも熱中しちゃつてアレだし……うん、お願いしてもいいかな？」

「は、はい！ がが、頑張ります！」

隣のヴィジュアライザーへと移動し、自分の神姫をセットするステージにガーネットを乗せROGを起動させる。

ライド  
オン  
ギア

R・O・Gとは3年前から急速に普及した、神姫と疑似的に一体化する“神姫ライドシステム”を搭載した神姫バトル支援用デバイスのことである。バトルデータの蓄積

や解析、神姫の状態を明確に表示したり武装の管理など多様なアプリケーションが内蔵された、神姫マスターにとつての必需品である。当初はやや大型だったものの、わずかな数年で小型化に成功し、今では腕時計程度のサイズにまで縮小している。

真琴と七海がROGを構え、互いに向かい合う。ガーネットとプリユイもステージ上で静かに睨みあう。

「じ、準備は、よろしいですか？ よろしければ、トレーニングモードを開始しますよ？」

「うん、大丈夫。いつでも行けるよ」

『へへ。マスター、今どんな気持ち？』

「……練習だけど、すっごくドキドキしてるよ」

ROG越しに神姫の声が直接伝わってくる。ドキドキしているというのは誇張でも何でも無い、真正銘本当の心境だ。僅かに声が震えているのが、七海に聞こえていなければと内心心配しているほどだ。

「では、始めます！」

「ライド・オン！」

ROGの神姫ライドシステムを起動すると同時に、大型ヴィジュアルライザーも同様に起動し戦闘フィールドを形成していく。トレーニング用のステージに選ばれたのは、正方形でほとんど白一色のステージである『神姫実験場』。所謂テストコースで、神姫の性

能を確認したりするのによく用いられている。障害物の一切無いこのステージでなら自由に動き回れるし練習には持って来いだ。

「あの、神姫にライドした感想はどうですか……？」

「……何だか、不思議な感じ。自分の腕に、誰かの腕が重なってるみたい……うん、上手く口で言い表せないけど」

自分の腕がぶれて二重になっている、とても言えばいいのだろうか。軽く動かそうとして見ると、普段そうするよりも幾分か重く感じる。かといって、真琴が右腕を動かすことでガーネットの右腕が動くという事は無い。このシステムは、マスターが「疑似的」に一体感を得られるシステムに過ぎないらしい。

「えっと……その、マスターである私たちは、基本的に神姫に指示を出して戦ってもらいます。私たちが神姫を操作するという事は出来ない。ここまでは、知ってます？」

「うん。ある程度は姉さんから聞いてきたよ」

予備知識があれば練習が円滑に運ぶと考えた結果である。……その間、手取り足取り姉ちゃんが教えてあげようかと五十回以上言われたが全て却下しておいた。

「じゃあ、感覚だけ掴めればもう戦えるかもしれませんね。……プリユイー、攻撃準備をお願いします」

『了解です、お嬢様』



バトルフィールドに視線を落とすと、当然ながら武装に身を包んだプリユイーの姿が見える。全身をグレーのアーマーで覆い、背部には大型ガトリングガンとライフルをマウントし、そして手には小剣付きのハンドガンを握りしめている。ミリタリートイメーカー『アームズ・イン・ポケット社』のノウハウが凝縮された火器型の名に恥じない力強い出で立ちだ。

「ゼルノグロード型……見た目通り、遠距離からの砲撃戦がメインだよな」

『へへっ、どんなに強力な砲撃だろうと、当たらなければどうでもいいんだよマスター』  
赤い神姫がそう言うのと少し雰囲気があるから面白い。

そして無論だがガーネットも戦闘用の装備に身を包んでいる。レースマシンをモチーフに赤くスポーティなフォームの武装の数々。脚部に装備されたユニットには<sup>ホイール</sup>車輪が備え付けられ、地上での高速移動を可能にしている。武器は大型のライフルに折り畳み式のナイフ。アーク型の基本はハイスピードな射撃戦闘だ。トライクモードによるスピードで翻弄し、あらゆる角度から射撃を繰り出し迅速に勝利へと猛進していく。流星は、モータースポーツで名を馳せる『オーメストラータ社』入魂の神姫である。  
「そ、それでは……撃ちますよ!」

七海の掛け声を合図に模擬戦が始まる。プリユイーは素早い動作で背部のガトリングガンを構え、ほとんどラグ無しで銃身を回転させる。高初速で叩きだされる銃弾の嵐

に、ガーネットはすぐさまホイールを走らせ大きく横に回避した。

『流石はアーク型、その脚は称賛に値します』

『マスター！ 呆けてないで、次は君の番だよ！』

「わ、わかった！」

ガーネットはガトリングガンを掃射するプリユイーを中心に円を描きながら高速で移動してくれている。ガトリングガンを撃っている最中ならほとんど防御には転じれないはず——それなら。

「ライフルをー！」

『了解ッ』

真琴の指示を受けガーネットがすぐさま大型ライフルのトリガーを引く。射撃中のプリユイーは身動き一つ出来ないため被弾するもアーマー部分を削ったに過ぎなかった。

『射撃のセンスも中々……ですね』

「練習だけどスムーズに動けてる……普通は、マスターがなかなか指示を出せなくてあつたふたしちゃうのに」

自分が初めて神姫バトルした時の事を思い出して、ほんのちよつぴり嫉妬する七海。同時に憧れもするのだけど、今はそんな場合ではない。

ガーネットの動きは戦闘を開始してからまだ数分と経たないのに少しずつ良くなっている。真琴の反応速度とガーネットの反応速度が同調して、七海が割と本気で狙った攻撃も易々と回避されてしまう。

『いい反応だよマスター！ 本当に、今日が初めての神姫バトルなのか疑っちゃうくらいにね！』

「ホントだよ。でも、何て言うか……体が反応しちゃうっていうか」

『私もそんな感じだよ！ 私とマスター、良いコンビになれそうだし！』

段々とガーネットの動きが高速化していく。知れず知れずのうちに通常モードとトライクモードとを使い分け、フォールディングナイフを織り交ぜた格闘戦まで繰り広げるようになっていた。完全に初心者を相手するつもりだった七海とプリユイーも、徐々に本格的な焦りが見え始める。

『し、初心者の動きとは思えません。既に、今の私たちで追いつける速度では……ッ』

「う、撃ちまくって牽制して！ 距離を取り直してから立て直しを——！」

「ガーネット、そのまま行けるよねッ」

『もちろん！ 私と一つになって、マスター！』

瞬間、真琴の意識とガーネットの意識が完全にシンクロする。トライクモードへと高速変形し、襲いかかる弾丸の雨に真っ向から立ち向かい、そしてその全てを回避してい

く。ガーネットがアクセルグリップを強く握りしめる。最高速に達したトライクモードそのままに——ガーネットはプリユイーに向けて一直線に突っ込んでいく。

『ま、まさかそのまま体当たりを——!?!』

『全開で行くよ——ッ!!』

最高速に達したトライクモードの衝撃は予想以上に凄まじく、プリユイーはステージの中央部分からステージの端まで吹き飛ばされ、同時にヴィジュアライザーがプリユイーを戦闘続行不可能と認知し機能を停止させた。ステージが上がってきたプリユイーは損傷こそ少なかったものの、目を回しながら完全にダウンしてしまっていた。

「ぶ、プリユイー!?!」

「あ……ああ!?! ご、ごごご、ゴメン西園寺さん! あ、つい勢いで……!」

「いえ、トレーニングモードだから直接的なダメージは無いはずですから、あの、気にしなくて、大丈夫です」

『勝ったあああッ!』

『うう……ゆ、油断大敵でした。申し訳ありません、お嬢様』

七海の手の中で目を覚ましたプリユイーはそう言うのと申し訳なさそうに頭を下げる。

「ううん、いいよ。私たちも、良い経験になったし……その、真琴君の初めての練習相手になれたし」

「プリユイー、大丈夫だった？」

「はい、大丈夫です」

七海の笑顔を確認してホッと胸をなで下ろす真琴。プリユイーの様子を見ようと真琴が一步踏み出した——その時だった。

「お兄ちゃん、すげー！」

「え……ええッ!？」

今の今まで神姫バトルに熱中していたせいで全く気付かなかったが、いつの間にか真琴と七海のヴィジュアライザーの周りには大勢のギャラリイが出来上がっていた。主にルーキーエリアの子供ばかりではあったが、遠くには大人や同じ年と思われる人たちもいて、連とねねも一番近くのベンチで見物していたらしい。

「本当に凄かったよ真琴君。神姫バトル未経験者だなんてのが嘘みたいに見えるくらいだ」

「やっぱり才能あるじゃーん！ ねえ、次はワタシとバトルしよッ！」

『だったら、いつそ大会に出てみない？』

気がつくと、真琴たちの使っていたヴィジュアライザーの上に神姫の姿があった。ライトグリーンのセミロングヘアに、小さなマイクを片手に握る牧師服のような黒いペイントの神姫。

「ハーモニークレイス型……？ え、大会って？」

『もつちろん、神姫バトルの大会ですよ。ルーキー限定のトーナメント！ もちろん、商品もありますよ♪』

「で、でもいきなり大会は」

『いいね、乗った！』

「が、ガーネット!？」

マスターよりも先に返答した自分の神姫を見下ろすと自信に満ち溢れた瞳で見返される。

『マスターの素質は十分だった。それに私の力が加われば、敵はいないって！』

「で、でもさ」

『ふふん。それでは参加登録というわけでよろしいですね！』

「わ、ちよつと！」

強引に話が進み、ハーモニークレイス型の神姫がヴィジュアライザーから部屋の中央のモニターへと飛び移るとモニターが『ルーキーズカップ開催！』とポップで鮮やかな画面へと移行した。

『とゆるわけで、これより神姫バトルルーキーズカップを参加しますよ！ 参加費、ポイントは一切不要！ 参加条件はこころキーエリアの神姫マスターと神姫のみ！』

さあさあ、我こそはと思う人はこの私、メリッサに参加登録をば、よろしくお願いしまーす！』

「な、なんか凄いコトになっちゃったんだけど……」

「いーじゃん！ 真琴の練習その2って感じでき。アタシも参加しよーっと」

肩に二二を乗せたねねはメリッサの元へ飛び込むと、人ごみの中へ姿を消してしまっ  
た。

「何だか忙しない展開だね」

『いいじゃないか。今の私たちなら優勝だつて出来るさ、マスター』

「……頼りになるね、ガーネットは」

本当に、優勝できるような気がしたのは気のせいなのだろうか。

小さな自信を胸に、真琴もメリッサの元へと一歩踏み出していった。

# 第一章 第3話

『さて、いよいよ始まります！ ルーキーズたちによる神姫バトルーナメント！ 今回の大会の実況は私、ハーモニィグレイス型のメリツサが担当します！ まずはこちらをご覧ください！』

彼女が示した先、このラウンジのメインモニターに全16名によるトーナメント表が表示される。真琴を始め、連やねねもトーナメント表に名前を連ねている。残念ながら、七海は抽選で外れてしまったため不参加だ。

『戦闘ルールに関しては公式戦のルールと同じ、加えて武装制限もありません！ 参加者の皆様には思い思い自由に戦っていただきます！ とにかく勝って、勝ちまくるだけ！ 難しいことなんてありません！ ただそれだけです！ 例え負けたって気にしちやいけません！ 涙は神姫と分かち合って明日への糧とします！！ えー、では諸注意をば——』

「……とはいえ、勢いで参加しちやったけど大丈夫かなあ」

モニターに表示された自分とガーネットの名前を見上げながら真琴は小さく呟く。つい数分前、トレーニングモードとはいえ真琴は練習相手である七海のプリユイーを



派手に吹き飛ばし、結果その派手さで多くのギャラリーを集めてしまい勢いでこの神姫バトル大会に参加してしまった。いざ本番前になると緊張するのは真琴の癖のようなものだ。

『ココまで来て何言つてんのさまマスター。初戦闘であれだけ動けたんだし、このままバシツと優勝決めようよ!』

真琴の手の平の上で鬨志に燃えているガーネットはグツと握り拳を作っている。頼もしい、本当に頼もしい。マスターよりも頼もしく感じてしまうことに、少々情けなくもあつた。

「ガーネットの言うとおり、やってみなきや分からないよ真琴君」

『それに、今日は神姫バトルの練習に来たんじゃないか。この大会も少し早い実践経験だと思えばいいんだ』

「うん……」

いまいち踏ん切りがつかないまま時刻は進み、いよいよ神姫バトルトーナメント開催の 때가 迫る。

「ああ! さっきのカッコいいお兄ちゃんじゃん!」

「え……あ、君はさっきの」

真琴の初戦の相手は、つい今しがたヴィジュアライザーの隣で囃し立てていた少年

だった。歳は……小学4年生くらいだろうか。バツサリと切り揃えられたショートヘアと頬つぺたについた絆創膏がやんちゃそうな雰囲気醸し出している。

「いきなりカツコいい兄ちゃんやんと戦うなんて、ツイてる！ オレもあんな技使ってカツコよく決めたいなあ」

『あはは……私に変形機能はないんですけど、よろしく願いますね』

彼の手の平に乗る神姫はそう柔らかく微笑っていた。白い素体がシンプルで綺麗な神姫で、何処となく見覚えのあるようなデザインだった。

「あの神姫は……」

『初代アーンヴァル型だね。素直だけど融通が利かないっていうか、私はちよつと苦手なタイプかなあ』

「アーンヴァル……そっか。ウチのアイリスの元になってる神姫だね」

アーンヴァル型とは、武装神姫の最初期にリリースされた神姫である。ガーネットの言うとおり素直な性格設定が施されており初心者オーナーにもおススメできる神姫だ。真琴の家のアイリスことウエルクストラ型神姫は量産型アーンヴァルと想定されている神姫で、デザインが似通っているのは当然のことである。見覚えがあるのはその所為だろう。

「オレとクリーム、手加減とか出来ないから覚悟してくださいよ！」

『……って、まだ神姫バトルを初めて1週間なんですけど、お手柔らかにお願いしますね』

『マスターより6日多くたって、私の実力でカバーすれば大丈夫さ！』

「よ、よろしく」

自分より年下相手だというのに、ガチガチに緊張しながら真琴はガーネットをステージの上へと乗せる。彼もまた同様にステージへクリームを乗せると、腕に装着しているROGを起動させた。

『では、衝撃の第一回戦スタートです！』

「ライド・オン！」

メリッサの声を合図に、各ヴィジュアライザーが一斉に作動しそれぞれのバトルフィールドが展開されていく。

真琴たちの戦うステージは『溪流ステージ』。ステージ自体はそれほど広くはないものの、ステージ中央を清らかな溪流が分断している。水深もそれほど深いわけではなく、ちょうど神姫の膝ほど程度までしか浸からなかった。

「足が冷たい……ような気がする。ガーネットはどう？」

『ううん……少し戦いづらいかもしれない。でも安心しなよマスター。ゼツタイ勝って見せるから！』

「わかった。僕も、出来る限りサポートするから」

会話もほどほどに対戦相手へと視線を移す。武装したクリームの手にはハンドガンとシールド、それから背部に大きなブースターとウイングユニットを装備していた。

『トランシエタイプ……空中での高機動戦闘を想定された武装パターンだね。ライフルで撃ち落として、ナイフで追撃つてのが一番のパターンだけど……』

「……じゃあ、まずは様子を見よう。牽制でライフルを撒いていく感じで」

『了解だよ、マスター』

試合のゴングは既に鳴り響いた後。今すぐにも撃ち合いが始まってもおかしくない状況下——先に動いたのはガーネットだった。

脚部のホイールを回し、ローラーダッシュで相手と一定距離を保ちながら円を描くようにして走り出す。

『こつちも行きましょう！』

「ようし、いつも通りで行くよ！」

ウイングユニットに装着していたブースターが火を吹くと一気に上空へと舞い上がり、あつという間にガーネットの射程距離外にまで逃げられてしまった。これではいくら撃つても弾の無駄である。

『行きます！』

「何か来る……？ 気を付けて、ガーネット！」

『動きまわりや当たらないよ！』

「よし、撃てえ！」

ヴィジュアライザーの表示限界高度から、クリームはハンドガンを放り捨てシールド内側に隠していたランチャーを装備し腰だめに構えた。瞳に映る照準を真下にいるガーネットへと目がけ——トリガー。

圧縮されたエネルギーが一筋の光弾となつて上空から降り注ぐ。狙いは少々ずれていたものの、ガーネットの足元に着弾と同時に爆発。直撃に比べれば多少ダメージが少なかったものの先手は取られてしまった。

「上空からのレーザーランチャー!？」

『つてて……マトモに当たってたらひとたまりも無かつた……ッ』

「続けて二発目！」

『はい!』

「また来る！ トライクモードで走つて！」

『わかつたよ!』

第二射が来るよりも先に変形し思い切りアクセルグリップを捻る。溪流を厭わず走り続けながら、ガーネットは高高度からの射撃を回避していく。

『避けるのはいいけど、これじゃ試合に勝てないよ!』

「……ランチャーにはランチャーで対抗するしかない。ガーネット、こっちの武器に交換して!」

ROGに表示されたガーネットの武装一覧から、彼女にも搭載されている大型ランチャー『シルバーストーン』をタップする。トライクモードの前方部分に取り付けられているランチャーユニット、トライクモードでももちろん使用することが可能で、ジェネレーターと合体させれば高出力を誇る『スーパーシルバーストーン』へと組み替えることが出来る。

『いいね! 私ランチャーはアーンヴァルのランチャーと違って実弾だし、射程距離も速度もこっちが上だ!』

「ただ、チャージに時間が掛かるしその間無防備になるから少し不安が」

『だったら、肉を切らせて骨をぶっ飛ばせばいい!』

「……わかった。任せるよ、ガーネット!」

『オッケー!』

トライクモードを解除と同時にシルバーストーンのロックを解除すると、その隙を見計らったかのようにまたレーザーランチャーが降り注ぐ。だが直撃には至らない。相手が同じ初心者ということもあって命中精度は良くないらしい。脚部ホイールを全開



両者がトリガーを引き、互いの砲身から銃声が吠える。スーパーシルバーストーンの赤い閃光とレーザーランチャーの青い閃光が交差し一直線に流れていく。初速の速い赤い閃光が先にクリームへと伸び、彼女のウイングユニットをバラバラに砕き、正しく飛ぶ鳥を落とす勢いで落下していく。青い閃光は、直撃こそしなかったもののガーネットの左肩をかすめその熱で装甲が焼かれてしまった。

「ガーネット!?!」

「クリーム!」

『つつう! もう少しずれてたら腕持ってかれてたね。……でも』

ガーネットは負傷した左肩を右手で庇いながら立ち上がると、撃ち落とされたクリームの方へと視線を向ける。彼女はうめきながら立ち上がるとうとするが――やがて行動不能となり戦闘終了となった。

『す、すみません……不甲斐ない神姫で』

「いいよクリーム! すつごく頑張ったじゃん!」

『ははは……お褒め頂き光栄ですよ、マスター』

「ガーネット!」

『どうよ! ちょっとダメージ負ったけど勝てうおわあああ!』

ステージに上がるや否や、真琴はガーネットの身体を両手で抱きとめる。神姫の小さ



な体を全身を使うようにして抱きしめ、当のガーネット本人は困惑して目をパチパチとしばたいたっていた。

「つはあ！ し、心臓に悪過ぎたよあれは……」

『ちよちよ、マスター！ あの、その、公衆の面前でこれはその……うわあ、恥ずかし……』

自分の機体以上に染まる頬と、手の中の熱を帯びる感触にガーネットは完全に慌てふためき、真琴の手の中から強引に身体を引き抜くとステージへ逃げるように飛び出した。

『そ、そそ、そういうのは時と場合を考えてよマスター！ しかも、まだ一回戦を勝ち抜いただけで大袈裟すぎ！ 狙うは優勝だって言っただじやん！』

「そ、そうだったね……ごめん。その、終始緊張しっぱなしでその……はは」

『それに……その、ほら、そういうのはこ、心の準備とか……出来てな……と』

全身が真つ赤になったガーネットを、対戦相手である少年が反対側ステージから羨望の眼差しで見つめていた。

「うわあ……ああいうの、いいなあ……」

『マスターと神姫の絆、ですか？』

「それもだけど……ほら、ああいうカッコいい人にギューッてされるの」

『へ……？ ああ、そっちですか？ ふふ、マスターってば意外と乙女ですね』

「そうだ名前！ 名前聞いておかないと！ おーい、お兄ちゃん！」

立ち去りかけていた真琴を呼びとめると少年はスツと右手を差し出す。

「オレ、『陽向居ヒムカイ 凜リン』って言います！ 今日負けちゃったけど……また今度戦ってくださいか？」

「あ……う、うん。僕なんかでよければよろこんで」

『締まらないなあマスター！ そういう時はもつとバシツと決めるんだよ！』

真琴はガーネットに促されるまま凜と固い握手を交わす。少年らしい華奢で小さな手は手汗でびっしょりだったが真琴もほとんど同じだった。

『次も頑張ってください！ 私たちも応援しますから』

「うん、ありがとう」

『次は二回戦！ どんな相手だって、私とマスターなら勝てるに決まってるよ！』

真琴たちの試合が終了と同時に、各ブロックの試合も終わりトーナメント表が更新されると次の対戦相手の名前が真琴の隣に表示される。

「君が、ボクの対戦相手になる者か！」

「……はい？」

突如として目の前に現れたのは、フォーマルな白いスーツに身を包んだ真琴と同一年

くらしいの少年だった。ただでさえスーツ姿で奇抜だというのに、それを際立たせるかのようにその手には薔薇の花が一輪。言い方は古いかもしれないが、一昔前の漫画で出てくるような成金のような姿だった。

「ボクの名は大道寺！ ダイドウジ 大道寺 タカマサ 高正だ！」

「え、えと……よ、よろし」

「あーあー、いや、名乗らんで結構！ 君は既に敗北が約束されているのだから、名乗られてもらつても無意味なのだよ！」

『な……んだとお！ おいお前、いきなり失礼なヤツだな！ 私とマスターがそう簡単  
に負けるわけないだろう！』

「ハツハツハ！ いくら吠えてもらつても構わないが……今のうちに棄権することをお  
勧めするよ。無惨に負けて生き恥を晒したくもないだろう？」

『き、棄権なんかするもんか！ 勝負つてのは、やってみなきや分らないだろ！』  
大道寺と名乗ったスーツ姿の少年はやれやれと、大袈裟な挙動で首を振る。

「まあ……一応忠告はしたよ。生き恥を晒したいどM君相手というのは少々面倒だが致  
し方あるまい。精々首を洗って待って」

「ま、真琴く〜ん！」

「あれ、西園寺さん？」

真琴の元へと駆けつけてくれた七海は手にジュースの缶を抱えていた。その中からオレンジジュースを取り出すと、そつと真琴に差し出す。

「あ、あの、おめでとうございます。その、さ、差し入れにこれをおと思って」

『ガーネット様にもヂェリカンのご用意を』

『お、気が利くね。ちようど飲みたかつたなあつて思つてたところさ』

「ありがとう、西園寺さん。僕も緊張しちやつて喉が乾いちやつて」

「西園寺……だど？」

オレンジジュースのプルタブを開けている真つ只中、大道寺は何故か七海の姿に釘付けとなつていてわなわなと体を震わせる始末。流石の真琴も怪訝な視線を送らざるを得ず、その視線を追いかけた七海はハツと顔を上げ目にも止まらぬ速さで真琴の背後に隠れてしまった。

「え、わ？ どうしたの西園寺さん？」

「ふふ……くくく……ハーツハツハツハ！ どうやら運命の神はよほど二人を強く結びつけていたいと見える！ 僥倖！ 正に僥倖！」

『さつきから何なのこの人。頭のネジが吹っ飛んでんじやないの？』

『無礼者！ マスターを侮辱する不屈きなものは、成敗いたしますです！』

ガーネットの言葉に反応するように、大道寺の背後から小さな影が飛翔する。青と白

とを基調とした優雅なデザインに金髪を揺らす神姫は、彼の肩に着地するとガーネットをキツと睨みつけた。

『私のマスターは、頭のネジもボルトもキツチリ締まってるです！ 全知全能の神がありとあらゆる才能を与えた究極のマスターなんです！』

『うわ、何かアホっぽいのが出てきた』

『アホっぽいんじゃないです！ 私は、大道寺様の神姫コーデイリアです！』

『アルトレーネ型の神姫……で、あの、西園寺さんはどうして隠れてるの？』

『ハツハツハ！ 相変わらず奥ゆかしい人だ！ 故にそそる！』

『……マスター、アレ通報した方がいんじゃないかな』

『あの、あの……あの人はその……うう』

『何を遠慮している！ 堂々と、ありのままの事実を言っ飛ばさばいいのだぞ』

言い淀む七海を前に、何故かテンション上がり気味な大道寺が声を張り上げていく。

「ならばボクが代弁しようではないか西園寺七海！ 君は、この大道寺正孝の許嫁である」とー」

「……許嫁？」

高らかにそう宣言した大道寺は、そのまま勢いで体を反らしながら無駄に大きな声で笑い始めた。

## 第一章 第4話

「えっと……つまり、次の対戦相手は大道寺つて人とアルトレーネ型のコーデイリア。……で、西園寺さんの許嫁だつて？」

2回戦の前、真琴は隣でしよぼくれる七海の傍に腰を下ろしていた。浮かばない顔をしている辺り、許嫁の話はあまり芳しくないというか、迂闊に触れてはいけないような気はしたのだが、真琴は何となしに訊ねてしまった。結果、彼女は深い深いため息をついてがっくりと俯いてしまった。

「今時許嫁なんて成立するんだね……現実味ないというか、何というか」  
「……………」

あれきり七海は一切口を利いてはくれない。思わず気まずい雰囲気になってしまい、真琴も言葉を掛けているのだが、そのほとんどに効果は見られない。

『ザイバツの話だとか、そういう込み入ったところに踏み込むのは野暮だけど……少なくとも七海ちゃんは嬉しくなさそうだね』

『お互いの親同士が勝手に持ち上げた話で止むを得ず、といったところですよ。お母様は熱烈に歓迎しているのですが、お父様は断固として反対しております。顔を見合わせる

度、その話ばかりでお嬢様も少々滅入ってしまう時もしばしば』

『……お金持ちつてのは大変だね』

『既にお嬢様には想い人が居られますのに……』

『想い人……そっか、なるほど』

そうこう話をしているうち2回戦開始の合図のブザーが鳴り響く。ガーネットは立ち上がると、プリユイーに向かってニツと笑んでみせた。

『よし！ だったら私がアイツをボコボコにして、少しでも七海ちゃんを元気にしてやらないとだな！』

『……えっと、その理屈はどうなんでしようか？』

『ま、どの道あんな変なヤツに負けるほど私のマスターはヤワじゃないからさ。安心しなよ』

大型ヴィジュアライザーへと向かう途中、ガーネットはもう一度だけ七海たちの方へ振り向く。

『私とマスターに任せておきな。あんなヤツは神姫共々ブツ飛ばしてあげるからさ』

「え？ どうしたのガーネット？」

『いいから、ほら！ ササツと進んだ進んだ！』

試合へと赴く二人の背中が小さくなっていくのを見送ると、プリユイーの後ろから七

海の手が伸びてそっと包み込む。

『大丈夫ですよ。真琴さんなら負けるはずありません。お嬢様だって信じてるでしょう？』

「でも、出来れば許嫁の話は聞かせたくなかったな……はあ」

『……向こうも向こうです。まだ確定したというわけでもないのにベラベラと』

※

真琴がヴィジュアライザーの前に辿りつくと、正面にスーツ姿で斜めに傾いだポーズの大道寺が待ち構えていた。

「結局、忠告の甲斐無く生き恥を晒しに来たというわけか」

「ガーネットも言ってたけど、勝負はやらなきやわかりませんよ」

『……マスター、こんなヤツに敬語使う必要無くない？』

『無礼です！ マスターには五臓六腑、全身全霊で敬うです！』

『あー、そりや多分“五体投地”って言いたかったんだろうな……死んでも御免だけど』

ステージの上に乗せ、ガーネットとコーディリアが対峙する。やたら張り切るガーネットを不思議に思うも、真琴はROGを起動させて試合に備える。

『ではでは、撃滅な2回戦！ 張り切っていってみましよう！』

「「ライド・オン！」」



2回戦のフィールドは大きく傾斜した地形が特徴の『工場ステージ』。広さはそれほどでもないが、溪流ステージとは違いあちらこちらに障害物が配置されている。銃撃戦ともなれば壁となって役立ってくれそうだ。ある程度ステージの全体図を頭に入れてから真琴はガーネットに語りかける。

「ガーネット、最初は障害物に隠れながら戦って様子を見よう。相手の武器とかを把握して、それから攻撃を」

『……そんなんじゃダメだマスター。〃虎穴に入らずんば虎児を得ず〃、こつちから先制攻撃を仕掛けて相手のペースを崩すんだ！』

「いや、でも……」

『私を信じて、マスター。出来る自信はあるんだ』

「……わかった。任せるよ」

ROGに表示されたライフルをタップし付属のバレルパーツを解除する。銃身が短く縮小されたことにより、アーク型のライフルは取り回しの良いハンドガンとして変形させることが出来る。威力こそライフルに劣るものの、撃ち合いとなった際には連射力を利かせて攻め続けることが出来る。

『よし、行くよー』

脚部ユニットのホイールを全力で回し飛び出していく。逆サイド、コーデイリアの初

期位置を目指し障害物を右に左へと迂回しながら距離を詰めていく。未だコーディリアの姿は見えない。ガーネットは障害物の上に飛び乗り加速していく。

「なんだ、隠れてる……?」

「逃げも隠れもしていないさ。逃げる必要も、隠れる必要もないからな! コーディアア—」

『合点承知です、マスター!』

不意に、がくん、とガーネットの視界が大きく上下し、思わず脚部ホイールを止め周囲に銃口を向け警戒を走らせる。コーディリアの姿は無い。しかし、仮想空間であるヴィジュアライザー内で地震が起こったとは考えられない。思考を巡らせる真琴を嘲笑うかのように、大道寺の高笑いが響いた。

「ハツハツハツハ! 余所見をしている暇があるとは滑稽だな!」

『ぶっ貫いて——やりませす!』

「——ツ! ガーネット、下だ!」

『なツ——きやああああ!』

気付くのが数瞬遅かった。ガーネットの足元に突如亀裂が走り、次いでその先から銀色に鈍く輝く円錐形の武器を手にしたコーディリアが飛び出し一瞬で距離を縮めた。

コーディリアが手にしていた武器はドリル。それも両手に一つずつ。ステージ上の

オブジェクトを易々と破壊する威力を誇る銀の一撃はガーネットのハンドガンを持ち一瞬でガラクタにして見せた。

「んー……直撃は免れてしまったか。君は運がいいな」

『もう少しで、素敵な風穴をご披露できたのにです！』

「が、ガーネット！」

『チツ……！ 一旦後退するよ』

ホイールを逆回転させバックダッシュ。肝が冷えたところの騒ぎではない。一步間違えていれば、真琴の反応が少しでも遅れていたら、本当にガーネットの身体に風穴が空いてしまうところだった。追撃に出るコーデイリアから距離を取りつつ真琴は打開策を考える。

「マズイ、あのハンドガンが無いとライフルに戻せないのに。残ってる武器も……ランチャーとナイフだけ」

ランチャーは銃身も長く、ハンドガンやライフルに比べれば圧倒的に取り回しが悪い。思い切り加速して距離を取ってから狙撃する案も考えたのだが、思いの外速いコーデイリアの速度を見て断念。

『自信があるとか言って、情けない……』

ROG越しに聞こえるガーネットの声も沈んでいて状況はかなり悪い。追い詰めら

れていると心が認識した途端、胸の鼓動がバクバクと外に漏れ出ているのではないかと  
思うほどに激しく頭に響いている。

——負けてしまう。不安はやがて恐怖へと変異し心を蝕んでいく。

「ガーネット、とにかく逃げて！」

「つは、無理だ無理無理。この特注のアルトレイネ型からそうそう簡単に逃げられは  
ないよ。モーターも市販のよりずっとイイモノを使っているんだからね。そこらへん  
の神姫程度なぞ遥かに凌駕している」

『大人しく風穴空けられるがいいです！』

『ちくしょう！ 穴なんか空けられて堪るか！』

トライクモードへ急速変形し、そのままアクセルグリップを捻りつ放しにして最大加  
速。数ある神姫の中でトップスピードを誇るこのトライクモードなら時間は稼げるは  
ず——そう信じる真琴の予想を、大道寺は嘲笑った。

「まさかとは思うけど、コーディアアの武器がドリルだけだと思ってるのかい？」

「——くッ！」

追撃の手を止めコーディアアが高く上昇したかと思うと、彼女の脚部に装備されてい  
たユニットのカバーが開く。中身はミサイル、しかも一度に多数のミサイルを射出する  
多弾頭タイプ。真琴のROGから突如アラートが鳴り響く。ミサイルユニットにロツ

クオンされたことを促す警告音だ。

「ジグザグに走って避けて！」

『言われなくても……ぐうッ!』

一発や二発程度ならそれでも避けられたかもしれないが、多弾頭ともなるとその物量は文字通り桁違い。雨のように襲いかかるミサイルを、真琴の指示通りジグザグに回避しても回避しきれないほどの物量がガーネットに降り注ぐ。

『くっそお! ウイングがやられて——ッああ!』

「ガーネットッ!」

被弾した衝撃で体のバランスを崩し、トライクモードを強制解除されたガーネットが体ごとフィールド上に叩きつけられる。どうにか立ち上がってはくれたものの、腕や脚部の装甲が損壊していた。

「どうしよう……ッ、今のでアーマーのほとんどがダメになってる……!」

『啖呵を切ったのは私なのに……これじゃ、マスターまで恥をかくことに……!』

負傷したガーネットを見下すかのように、コーディリアは白き翼をはためかせながら優雅に障害物上に着地する。マスター、神姫共々鬼の首でも握っているかのような得意気な顔をしている。

「降参するなら認めてあげないこともないが……どうする?」

『マスターの慈悲深さに感謝するのです！ 私も、弱い者いじめは嫌いですからです！』

『……だ、誰が弱いって!?!』

「……………」

噛みつくガーネットを他所に、真琴の指先がゆつくりとROGへと伸びていく。画面端、この試合を強制的に終了させる——リタイア宣言するためのカーソル。開くと、警告表示と共に最終確認用の赤いカーソルが表示される。宣言すれば当然真琴の敗北となり、引き換えにガーネットの安全は確保できる。

真琴は、迷っていた。

自分にとって人生初の、自分専用の自分だけの神姫。別に、このまま続けて負けたとして彼女を完全に失うということはない。だが、彼女と自分の心に大きな傷を負ってしまふような気がして——真琴は、怯えていた。

『ま、マスター……? まだだ、まだ私はやれるよ!』

「無理だな、諦めたまえ。既に君の神姫は使い物にならない状態だ。そのまま戦っても結果は見えている」

「……………」

指先が、赤いカーソルに触れようとしたその時だった。

「なんだ、もう諦めちゃうのか? それじゃ私の弟失格だね」

弾かれたように顔を上げ、声の方向に視線を飛ばす。七海の座っているベンチの隣で姉が、一ノ瀬風花が立っていた。ざわつく群衆の中、マリアヴェルを肩に乗せニツと勝負な笑みを浮かべながらこちらを見つめている姉の姿に、真琴は思わず目を見開いていた。

「ね、姉さん……!?!」

「弟の初陣だつて聞いたから見に来たのに……目の前で白けさせてくれるようなコトしないしてほしいね。ま、そんなアンタのために、その子を買ってあげたんだから」

「僕のために、ガーネットを……? どういう——」

『マスター!』

ROGから響く神姫の声にヴィジュアライザーへ視線を戻すと、そこには未だ闘志を燃やすガーネットの姿があった。

『最後まで諦めちゃダメだ! 全力で、最後まで私は戦うから、マスターも、一緒に戦ってほしいんだ!』

「ガーネット……」

ステータスは決して良い状態とはいえない、むしろかなり悪い。真琴は半ば諦めかけていたというのに、しかし彼女は一切諦めていなかった。

彼女の瞳を見る。15センチと言う小さな体には、到底収まりきれないような大きな

闘志がメラメラと燃え上がっている。それに比べて自分は、何と情けないことか。

……真琴は決心した。

「考えが、あるんだけど」

『マスター……ッ!』

「往生際の悪い……トドメを刺してしまえ、コーデイリア!」

『りょーつかいです!』

ROGの武器一覧からシルバーストーンを選択すると、ガーネットの手に身の丈ほどのランチャーユニットが装着される。彼女はそれをコーデイリアに対して撃つのではなく、足元に目掛けてトリガーを引いた。高出力の弾丸はフィールドを砕くと同時、周囲を白煙で包み隠してしまった。

「ふん、目眩ましのつもりか? 無駄な足掻きばかりを……」

『……見つけたです! また懲りもせずに逃げ始めたです!』

白煙のその先、トライクモードに変形したガーネットが坂道を一気に駆け上がった。大道寺は多弾頭ミサイルをタップし、コーデイリアに射撃指示を出す。当たればよし、当たらなくとも疲弊したところにドリルで追撃をしまえば幕が下りる——勝利は目前だった。

「無様に散ってしまえばいい! やれ!」



雨のようなミサイルが再びガーネットへと襲いかかる。右からも左からも、広範囲に射出されたミサイルはやがてガーネットへと直進していく。

『……覚悟しな、全開で行くよ』

坂道の頂点まで達した時、ガーネットは体全体を使って180度ターンさせると、アクセルグリップを全開で回す。下り坂というコンディションは最高速に特化したトライクモードを瞬時にフルスピードへと昇華させる。普段以上の速度で駆け降りるガーネットにミサイルの雨はかすめることさえ出来ず無惨に地べたへと墜落していく。トライクモードを維持したまま、ガーネットはグリップを握りしめたまま前を——コーデイリアを見据えた。

「血迷ったか……そんな体当たり程度、コーデイリアに当たるわけがないだろうー!」  
「……ガーネット!」

『ぶ、まるで猛牛さんです。そんな攻撃、闘牛士さんみたいにヒラリと楽勝です!』  
『猛牛……そうだね。今のコイツはブレーキ壊れてるから、猛牛みたいに突っ込むことしか出来ないね』

不敵な笑みをメット越しに浮かべ、ガーネットはそつとグリップから手を離れた。

最高速に達したトライクモードは愚直なまでにまっすぐコーデイリアへと進み——彼女は真上に跳躍し易々とこれを回避した。直進したトライクモードはそのまま最高

速を維持したままステージのオブジェクトへと激突し大爆発を起こしてしまった。燃え上がるパーツを見つめながら、大道寺とコーデイリアは高笑いした。

「ハーツハツハツハ！ 自滅とは何と愚かな！」

『勝てないと諦めて、マスターの勝ちに花を添えてくれたのです？ どっちにしるおバカさんなのです』

『ハツ！ 何言ってるんだ、私はこつちだよ！』

上空から落ちてきた声にコーデイリアと大道寺が同時に見上げる。コーデイリアよりもさらに高い位置、そこにフォールディングナイフを握りしめたガーネットの姿があった。爆風を利用しコーデイリアよりも高くに飛び、上空から急襲を仕掛けることこそが真琴の狙いだった。

「行け、ガーネットツ！」

『つしやああああああああああ!!』

呆気にとられているコーデイリアに向け落下速度を乗せた一撃を叩き込むと、彼女の身体は白い流星となって地面へ一直線に堕ちていった。落下の衝撃で出来上がった小規模なクレーターの中心で、コーデイリアは力尽きそのまま戦闘続行不可能と判断され長かった戦いに決着が付いた。

「そ、そんな……そんな馬鹿な……!!？」

『す……すみませんです……ま、マスター……』

大道寺の元に帰ってきたコーディリアはステージの上できめぎめと泣きだし、対して逆転勝利したガーネットはステージが上がりきるよりも前に飛び出し真琴の腕の中に飛び込んだ。

『勝った……！ 勝ったね、マスター！』

「うん、うん……！ よく頑張ったね、ガーネット！」

『マスターのおかげだよ！ 最後の最後まで、私を信じてくれて嬉しかった……！』

「おめでとうございませ、真琴君！」

すぐさま七海たちも駆け寄り互いに笑い合う姿を見て——風花はニツと笑みを浮かべる。それに気づいたマリアヴェルが密かに耳打ちした。

『もしかしてえ、真琴サンも“才能”有りってヤツです？』

「見てたでしょマリアヴェルも。途中から真琴は指示を出してない。それなのに、神姫の動きは衰えるどころかむしろ加速していた……答えはもちろん、でしょう？ ま、私ほどじゃないとは思うけど」

『ふふふふ。いつか戦える日が楽しみですよ。その時が来たら……くふふ』

「……じゃあ、その時に備えて“アレ”を用意しておかないとか」

風花は携帯電話を取り出し電話帳を表示しお目当ての人物の名前を検索する。

「あ、もしもし？ ちょっと頼みたいんだけど用意してもらえる？ ……そ、ROG用のアップデートアプリ。うん、私の弟も適正有りみたいだからさ、様子見して機会が来たら……ってわけ。うん、じゃあお願いね」

『お電話は……ああ、昂クン？』

「そういえば、私の時もお世話になったっけ……何か懐かしいな。今度、ご飯でも奢ってあげようかしら？」

『おやおやあ……？ 弟にお熱な風花にしては珍しいですう。もしかして、もしかして？』

「そんな態度見せたら彼の神姫に殺されちゃうっつての。……じゃ、行きますか」

携帯電話をポケットにしまい込み、勝利の余韻に浸る真琴を残し風花は神姫センターを後にした。

## 第二章 【神姫誘拐事件】

## 第二章 第1話

「今日もバリバリ戦えて楽しかったね、クリーム！」

『はい、マスター。残念ながら大会は初戦で敗退してしまいましたが、私も良い経験が出来ました。今日の結果を、次のバトルから積極的に生かしていきたいと思えます』

夕暮れの差し込む帰り道。陽向居凜は道端の石ころを蹴りながら、ふと同じ大会に出場していた真琴のことを思い出した。

「でも、真琴兄ちゃん……残念だったなあ。2回戦はあんなにカッコよかったのに、次の試合であっさり負けちゃってさ。応援が足りなかったかなあ」

『ふふ。マスターがもつと一生懸命応援してあげたら、今度は真琴さんも勝ってますよ』  
「そうかな？　へへ、じゃあ今度はもつと頑張ろ……うん？」

『どうかしましたか、マスター？』

目の前の四つ辻を北に抜ければ自宅なのに何故か立ち止まった凜の視線を追うと、夕焼けを背に立つ小さな人影が見えた。人影の大きさは15センチ程度、つまり神姫と同等のサイズなのだが、足元まで伸びた影は凜を易々と飲み込んでしまえそうなほどに大

きく長く伸びている。

「誰かの神姫……かな？　もしかして迷子？」

『話しかけてみましょうか。もしかしたらお力になれるかもしれませんし』

「そうだね。困ってる人も神姫も助けてあげなきゃだもんね」

クリームと共に神姫へと駆け寄り凛は片膝をつく。迷子と思しき神姫は狐の面のせいで顔は分からなかったが、銀色の髪が夕日に反射して宝石のように輝いていた。

『こんにちは、フブキ型神姫さん。何かお困りですか？』

『あ………えと、すみません。実は、マスターの命令で人を探してるんですけど……その、地図のアプリケーションデータを失くして道に迷ってしまつて』

面越しのくぐもつた声は小さく、彼女が困り果てている様子が良く分かる。凛は無意識のうちに手の平を差し出していた。

「じゃあ、オレも手伝う！　もちろんクリームもね！」

『はい。お供しますよ、マスター』

『そんな……でも、よろしいのですか？　ご迷惑では』

「へーきへーき。ちよつとぐらい帰りが遅くつたつて大丈夫だよ。クリームと一緒にだ  
っ」

『ではその……お言葉に甘えて』

フブキ型の神姫は凜の小さな手の平に飛び乗り、それを合図に意気揚々と歩きだす。

とはいえ、彼女が探しているという人物の情報が無くては凜も協力しようがない。歩  
きながらそれとなく訊ねてみると、彼女はぼつりぼつりと語りだした。

『えつと、まず女性で、髪は金色。白い衣装の似合う、真面目で優しそうな方です』

「ふうん……？ 何だかそれ、オレのクリームみたいだね」

『私と似ている方をお探しですか……？ 人間の方で金髪ともなれば目立ちますし、す  
ぐに見つかりそうですね』

『ええ……というか、既に見つけてますので』

「え？ 何か言っ——？」

凜が視線を落としたその時、手の平に乗っていたフブキ型神姫が突如フツと霞のよう  
に姿を消し、次いで凜の耳元でパチン！ と何かが弾けるような音と衝撃が響いた。

「ツあ——？」

『マスター？ ……マスターツ!？』

全身に緩い電流が奔ったような感触に襲われ、凜の小さな体がゆっくりと崩れ落ちて  
いく。異常事態を目の当たりにしたクリームが驚愕に目を見開き、何が起こったのか状  
況を把握しようとした——瞬間だった。

『申し訳ありません。少しの間、貴方の身柄を預らせていただきます』

『何を——ッ、くああ!』

全身を駆け巡る電流に視界がぼやけ、やがてクリームの意識がゆつくりと吸い込まれるようにして薄れていく。

刹那、臆気な視界のその先に——不気味な笑みを浮かべるフブキ型神姫の姿を垣間見た。

※

初の公式戦を終え数日経ったある日の火曜日。

昇降口を越えた辺りで、傍を通り過ぎる生徒たちからこんな話を耳に挟んだ。

「知ってる? また転校生が来るんだって。ほら、前の子と同じクラスに」

「隣の男の子で、神姫バトルがメツチャ強いって話だろ?」

「ミステリアスでクールな人だって噂よ? どんな人なのかなあ、イケメンかなあ」

「……転校生、か」

かくいう真琴自身も転校生。転校生が来る直前のそわそわとした生徒たちの合間を歩きながら教室へと辿りつくつと、連やねねも同じ話題で話をしていた。机の上にはハヤテとニニもいる。七海は——今日はまだ来ていないらしい。



「おはよう蓮、ねねちゃん。転校生の話ってホントなの？」

「おつはよー。うん、ホントみたいだよ」

「しかもうちのクラスに。さつき、職員室に行った人が見たって言ってさ。肩に神姫を乗せてたらしいよ」

「どんな人なんだろう？ 何だかちよつと緊張するね」

「あれ？ 真琴クン、ガーネットちゃんは？」

「ん？ 呼んだかい？」

制服の胸ポケットがもぞもぞと動いたかと思うと桃色の髪がびよこんと飛び出す。学校に来る時のガーネットの定位置であり、本人も割と気に入っているポジションだ。

『にしてもさ、転校生つてのはそんなに待ち遠しいモノなの？ 私のマスターの時も、こんな感じだった？』

『ううん、今ほどじゃないけどこんな感じだったよ。風花さんの弟って分かったのは転入した後だったしね』

『でもでもー、やっぱり転校生が来るのはドキドキするよー。どんな人が興味湧くもんね』

「お、おはようございませう〜！」

遅れて七海も加わり、再度転入生に関して話を切り出そうとしたところでチャイムが

鳴ると、担任の先生が早速転入生の事を話し始めた。

「はいはい、皆静かに。今日は、もう一人の転入生を紹介するからね。……じゃあ、どうぞー？」

先生に促され現れたのは噂通りの肩に神姫を乗せた少年だった。15センチ基準の神姫にしては少し小さめで、薄紫色の髪を両サイドで短く結っている。素体のカラーリングは黒。紅色の瞳が周囲をぐるっと見回すと、マスターよりも先に口を開いた。

『ここがマスターのクラスか……うんうん、良い感じなんじゃないかな』

「ええつと……水城君、まずは自己紹介をお願いしてもいいかしら？ その、出来れば自分で」

「……ベル、今はいい。自分でやる」

『えー？ ……じゃあ、しよーがないなあ』

「……水城君、だつて？」

転入生の名字に覚えがあるらしく、前の席の蓮がこつそりと呟きを漏らす。真琴は覚えがあるようなないような少々あやふやだった。転入生は以前の真琴と同じように白いチョークで名前を書いていく。真琴の時は名字を書いた辺りで背後がざわついていたのだが、今は終始ざわつきっぱなし。特に女子が。何せ、件の転入生が男の真琴から見てもかなりの美少年だったからだ。やや癖つ毛の黒髪にダークブルーの瞳。しつとりと

落ち着きある雰囲気、穏やかな表情で、女子は既にメロメロらしい。隣の七海とねねもぼんやりと彼を見つめていた。

「……水城祐樹です。よろしく」

「やっぱり……」

「やっぱり？ やっぱりって？」

「覚えてない？ 神姫センターのエキシビジョンマッチで20連勝以上してた人。……あの人だったんだ」

蓮にそこまで言われて真琴もようやくと思いついた。青サイドで23連勝していた人物の名前は水城祐樹とモニターに表記されていたのだ。

それからは真琴の時と同じように、細かな質問は休み時間にやれと先生に促され、そして休み時間になった途端質問タイムの始まり。前回と違って、圧倒的に女子の質問量が多い。

「蓮君、もしかして結構気になってるにや？」

「是非とも神姫部に欲しいなあと思ってる。……応じてくれるかな？」

「んー……よくある、自分より強い人じゃないとダメって言われるかもよ？」

「それは困るなあ……でもま、誘うだけ誘ってみようか」

周囲の女子がようやくと離れつつある頃を見計らって蓮とねねが彼の席へと向かう。

一応、真琴と七海もその後ろに着いていく。

声をかけると彼は特に反応を見せず、逆に彼の神姫が反応してくれた。

『あれ？ またユーキに質問？ 転入生つてのは大変だね』

「ちよつと訊きたいんだけど、いいかな？ 前に神姫センターで20連勝してたのつて君たちだよな？」

すると、蓮の声に無反応だった祐樹が僅かに顔を上げた。穏やかだが、間近で見ると何処となく虚ろな印象を受けた。

『あー、そういえばそんなことしたっけね。こっちに引越してきて退屈だったから、近くの神姫センターに遊びに行ったんだよ。で、適当に戦って適当に連勝してただけなんだよねー』

「そんなに神姫バトル強いならさー、一緒に神姫部やらない？ ワタシたち夏の戦女神杯出るの目標でさ、強いマスターなら大歓迎だよー」

『へえ、夏の戦女神杯ね……どうする、ユーキ？』

「……………」

沈黙思考とはこのことか、蓮とねねの誘いに祐樹はしばらく俯いて考えていて——やがて小さく頷いた。

「…………ちよつと興味あるから、見学させてもらう。入部するかどうかは、その後で」

「んじやー、今日の放課後に案内するよー。楽しみにしててね。……あ、ワタシは鬼灯ねねで、こっちは天城蓮君」

「それと、後ろの二人が西園寺七海さんに、一ノ瀬真琴君」

「……一ノ瀬？」

ダークブルーの瞳が真琴をちらりと見据える。名字で反応されるのは既に慣れっこだったので、真琴は苦笑を浮かべながら改めて名乗った。

「やっぱり、水城君も姉さんのこと知ってるんだね」

『御神楽町の神姫マスターで一ノ瀬風花を知らない人はモグリだもん。へえ、キミが噂の真琴君か』

『で、私が相棒のガーネットだ。ヨロシクね』

「……水城祐樹。こっちは、俺の神姫のベル」

『ボクの名前はベ——って、ユーキがボクの分まで名乗っちゃ意味無いじゃん！』

よろしく、と差し出された右手を握り返すと祐樹は僅かに笑みを浮かべた。

その視線は、何となく真琴にだけ向けられているような気がした。

## 第二章 第2話

場所は変わって、神姫部の部室である理科室。

顧問の杜若先生の姿は無く、代わりに『今日は各自自由で!』と書き殴られたメモが黒板に張り付けてあった。

「……また職員会議かな」

「んじゃーヴィジュアライザー借りて神姫バトルしようよ! 後輩たちにはいつも通りの指示を出しておけばいいよね?」

「ん、了解」

神姫部の部長は蓮で下級生たちに今日の清掃場所についての指示を出している。意外なことに副部長はねねらしい。部活動で使うヴィジュアライザーを準備室から引っぱり出してくると慣れた所作で早速電源を点ける。

「と、こ、ろ、で、さ? よかつたらワタシと神姫バトルしてみない? 水城君の腕前を体験してみたいんだけどー?」

『「二二も興味あるぞー」』

ねねの唐突な申し出に困る様子もなく祐樹は静かに頷いて承諾。

ベルをヴィジュアライザーのステージへ乗せるとそれを合図にニニもステージへと飛び移る。

「……準備が出来たら、いつでもいい」

『ボクも準備万端だよ。何時でもどこでもかかって来いつて感じかな』

「ねねちゃん、フィールドはどうするの?」

「じゃ、これ使つてくれない?」

ねねは小さなディスクを取り出すと蓮に手渡し、連もそれをヴィジュアライザーの中へとセットする。マップディスクと呼ばれる代物で、市販されている物の他に個人でもある程度改造することが出来、オリジナルのフィールドを作りだすことも出来る。今手渡したものはねね手製のディスクである。

「……もしかして、ねねちゃんのアレ?」

「ふふん、それは見てのお楽しみ。じゃあそろそろやりますか!」

「ライド・オン!」

ビジュアライザーが起動し、セットされたマップデータを読み込み仮想空間を構成していく。以前ここで使用されたのはこの理科室そっくりなフィールドだったが、ねねのディスクによって作りだされたフィールドは緑一色の世界だった。

「あれ……ジャングルステージ?」

「ねねちゃんのお気に入りだよ。あのステージ出す時って、大抵本気出すって時なんだ」  
神姫を遥かに凌駕する大木が並び立つ、さながら熱帯雨林がそのままバトルフィールドになったかのような有り様。アルトアイネス型のベルもジャングルフィールドで戦うのは初めてなのかあちらこちらに視線を巡らせていた。

『はえ……何だか、凄い空間だね。普通のバトルを想像してただけど……』

『んっんー、久々にこのバトルフィールドだあ。腕が鳴るねー』

『……でも、どうしてお気に入りなの？』

「見てたらわかるよ」

蓮に言われるまが、真琴と七海はヴィジュアライザーの中を食い入るようにつめる。対峙し合う二人、先に動き出したのはニニだった。まっすぐベルに向かって駈け出し両腕に装備した大型クローを展開。

『来るよ、ユーキ』

「ニニ、いつも通りで行くよー！」

『あいあいさー』

そのまま振りかぶるのかと思いきや、ニニはベルを大きく飛び越えそして大木の中へと姿を消してしまった。

『……どうする？ こっちも追いかける？』



祐樹はベルの言葉に首を横に振って答える。相手の動きを見てから決めるつもりなのだろう。時折木々の揺れる音に最大限警戒しながら、ベルは右手に小剣を握りしめる。がさり、と木の葉が揺れるたびに体を強ばらせ振り返る。右に左に前後、全方位に神経を尖らせ二二の攻撃に備える。

そしてフツ、とベルの頭上に影が差した。

『……もらったッ!』

脳天目がけての急襲。落下速度も相まって反応できなければ大ダメージは免れない。どうやら、ねねは正面から堂々と戦うことよりも闇討ちのような相手の隙を突く戦術の方が好みらしい。真琴だったら反応できるかどうか怪しい一撃を——しかしベルはあっさりと受け止めてしまった。

『まあ、悪くないかな。普通の神姫相手だったら効果あつたかもだけど』

『わ、わ、わわわ!』

黒い剛腕が二二の両腕をがしりと掴み放さない。受け止めた、とはベル自身がではなく彼女が装備しているバックユニット『ノインテーター』の腕が受け止めたと言った方が正しいか。アルトアイネス型、そして同系機のアルトレーネにも装備されている神姫自身とは別の大型のアームユニット、所謂『副腕』と呼ばれる両腕に掴まれた二二は全く身動きが取れず足だけをじたばたと暴れさせていた。

『うわーん！ は、放せたらー！』

『しょーがないな……ほらッ』

放り投げられたニニは本物の猫さながらにくるくると回転しながら着地すると、一度バックステップしてからジリリとベルを睨みつける。

『ど、どうする……？ もつかいやる？』

「今度は別方向から突撃！ こうなつたら突撃あるのみ！」

再び急襲を仕掛けるためニニは木々の中へと姿を消していく。やれやれと言った感じでベルが首を振る。

「……もう見切ってるってことだよね、アレ」

『20何連勝つてのは伊達じゃないみたいだね、マスター。……というか、かなり戦い慣れてる感じだ』

木陰から縦横無尽に飛び掛かってくるニニの攻撃を、ベルは小剣と副腕に取り付けられていた盾を上手く使って受け流している。徐々に攻撃の精度は高まっているはずなのに傷一つつくことがない。ニニとマスター共々、少しずつ顔色に焦りの色が見え始めてきた。

「ぜ、全然攻撃が当たらない……何で？」

『やられっぱなしってのもアレだし、今度はボクから行こうかな——ッ！』

何度目かの二二の攻撃を弾き返すと、ベルは手にした小剣とは別の大型の剣を取り出すと、二つの剣の柄を繋ぎ合わせ一振りの合体剣——ダブルブレードを形成する。刃渡りが微妙に異なるダブルブレードを副腕でくるくると調子を確かめるように振ってから構える。地面をめり込ませるほど強く踏み込むと刹那の速さで二二に肉薄する。

『いッ!?!』

『せえ——のッ!』

短い掛け声と同時にベルの姿が霞と消えたかと思つた矢先、二二の身体が大木に叩きつけられていた。損傷こそなかったものの、ダメージの所為で二二は目を回しながらダウンしてしまつた。戦闘終了後、ステージから上がってきてからしばらくしてようやく気が付いたようだ。

「……………」

『…………す、凄い…………な』

その一瞬、祐樹とベルを除く全員には何が起こつたのか全く理解が出来なかつた。絶句する面々を前に、ベルは快活に笑いながら頬をかいていた。

『あつはは…………もしかして、やり過ぎちやつた、かな?』

「ねねちゃんだつて相当強いのに、こんなあつさり…………」

「う、ううぐぐぐ…………う、うわあああ、ああああああん…………!!」

唸り声かと思つて真琴が視線を向けてみると、そこには大粒の涙を浮かべ号泣寸前の表情のねねの姿が。唸り声は泣きべそに、泣きべそが完全に嗚咽に変わるととうとう泣きだしてしまい、二二を抱えて何処へと走り去ってしまった。

「……ああ、えつと……ごめん、ちよつと行つてくる」

蓮が泣きだしたねねを追いかけ、残った祐樹やベル、真琴や七海たちも少々気まずい雰囲気になまれ中々言葉を出せずにいた。

「……ベル」

『あ、ちよ、ボクの所為にするつもり!? そりやないでしょユーキ。挑んできたのはあの子なんだから』

『そうだよ。君たちに落ち度はないさ。気にすることはないよ』

「……ああ、あれ? ガーネット? 何時の間に?」

いつの間にかガーネットは真琴の胸ポケットから離れヴィジュアライザーのステーション上に仁王立ちしていた。その背中には、いつになくやる気を感じる。覇気というか、何というか。

『次は私と勝負しようよ。ここで君に勝つて、ねねちゃんと二二の両方の仇を取つてやるよー!』

『うわあ……完全にボクが悪役なんだけど……』

ちらとベルが祐樹を見上げるとこくりと首肯するのが見えた。祐樹としても真琴には少し興味はあった。

『……わかったよ。じゃ、準備して』

『私は出来てる。マスター、頼むよ』

「いいけど……僕なんかじゃ、てんで相手にならないような気がするんだけど……」

ヴィジュアライザーの前に立ちROGを構え——ようとして、ねねのマップディスクが入れっ放しなことに気付く。

「水城君はマップディスクとか持ってないの？」

「……持ってない」

「じゃあ、代わりに僕のを使おうか」

ねねのディスクを取り出してから真琴は自分のディスクをセットする。といっても、今朝になって風花が唐突に手渡してきたもので詳細は知らない。

ただ、風花はガーネット好みのステージだと言っていた。ガーネット付き合っただけでもないで彼女の好みというものが少し分からなかったのだが……

「じゃあ、行くよっ？」

「……ん」

「「ライド・オン！」」

上書きされたマップデータがフィールドを再構築していき、やがて熱帯雨林のような空間は一変してライトブルーの世界へと変貌していく。地面は楕円形に窪み、周囲の壁も同様に丸みを帯びていく。例えるなら、丸いトンネルの中に入ったような感じだろうか。今まで使ったことのないフィールドに好奇心と同時に不安が過ぎる真琴だったが、フィールドで戦うガーネットはやや上機嫌でその場でステップを繰り返していた。

『うわ……何だろ、コレ。体が軽いつて言うか、足元がフワフワしてて気持ちがいいね』  
「足元がフワフワ……？」 別に柔らかい材質ってわけじゃないみたいだけど」

『チューブステージ……だよ、コレ。今日のボクたちってばとことんアウエーなワケだ』

「……チューブステージ？」

確かに見た目は円形に張り巡らされたチューブ内部がそのままバトルフィールドになったような景観なのだが、それがどうしてガーネットの好みのステージなのか全く見当が付かない。フィールドの中のガーネットは確かにご機嫌なのだが、真琴としてはちんぷんかんぷんである。

「あの……その、チューブステージっていうのは、神姫の足と地面との間で磁力反発が起こつて、足が速くなるステージの事なんですよ」

「……ええつと、つまり？」

『ガーネット様のような“速い”神姫に持つて来いのステージと言うことですよ。持ち前のスピードをさらに加速させることが出来るんですから』

「……そ、そっか」

『気付くのが遅いよマスター!』

だから足元の調子を確かめていたのか。七海とプリユイーに教わらなかつたらそのまま気付かなかつたかもしれない。

「あ、ありがと二人とも」

「こ、ここ……これぐらいは……その……」

『……ホントに素質あるのか疑っちゃうね』

『あん? 何か言ったか君?』

『何でもないよー。んじゃ、始めよっか!』

パチン、と小さく爆ぜるような音が響くと同時ガーネットの目の前にベルが躍り出た。

『ッ、と!』

緋色の一閃をバク転で回避し、そこからライフルによる射撃で反撃に転ずるもこちらも避けられてしまう。磁力の反発という条件は同じ。ごく普通に繰り広げられる剣戟や銃撃も、普段に比べればかなりスピーディでスリリングだった。幸い、ベルは銃のよ

うな遠距離武器を持っていない。となれば元々高速射撃戦闘が基本のアーキ型に分がある。

「ガーネット、無理に近づかないでライフルメインで行こう！」

『了解だよ、マスター』

脚部ホイールを逆回転させ、ベルに背中を向けないようにしながらライフルを掃射。ベルはガーネットの射線から体をずらしながらこちらに距離を詰めてくる。

『ねえねえユーキってば。ボクにも銃とかそういうのが欲しいんだけど？』

「……考えとく」

名の通り張り巡らされたチューブの中を駆け巡りながら、時折フェイントを交えてトリガーを引いても手応えは無し。回避、或いはダブルブレードの刃で弾丸が弾かれたりと、ガーネットの攻撃が決定打へと繋がるのか雲行きが怪しくなってきた。

『加速するよユーキ！』

背部のノインテーターが左右に展開され、さながら巨大な黒の翼と姿を変形すると、それまで互角だったスピードの均衡が崩れる。後方に見ていたベルの姿がぐんぐんと近づいてくる。風を切る音がガーネットに伝わり、ROGを通して響いてくる。ハッと気づいた時には追い越され、ベルのダブルブレードが目前まで肉薄していた。

「フォールディングナイフを！」



『間に合わない——りやあああッ!』

ナイフの展開が間に合わないかと判断したガーネットは一瞬の隙にライフルを横向きに向けてブレードの切っ先にぶつける。衝撃は弾倉内に装填されていた弾丸が起爆し、お互いに反対方向に吹き飛んでいく。

『ああ、クソッ! またライフルが壊れちまった!』

『これで銃の攻撃はなくなつたね。今度はこつちが一気に詰めて勝たせてもらうよ——!』

「ガーネット!」

副腕で握っていたダブルブレードを分離させ大剣『ジークムント』に組み替えるとなれば跳躍。磁力の反発を受けた一蹴りはあつという間に至近距離へと達する。咄嗟にナイフを振るも威力も重さもケタ違いで文字通り刃が立たなかつた。

『ぐ、ツうう……』

『これで、二連勝だ——ッ!』

「ガーネット、後ろに飛んで!」

『り、了解!』

轟々と唸りを上げる剣戟をくぐり抜け、ガーネットは真琴の指示で後方にバックステップ。磁力反発の効果のお陰で予想よりも遠く飛んでしまったが避ける分には問題

ない。

「……いい？ タイミングは僕が言うから、ガーネットはそれに合わせて」

『マスター……？ いや、何でもない。信じてるよ』

一度折り畳み、V字状に変形させたフォールディングナイフを逆手に持ち変えると、ガーネットは静かに腰を引いて低姿勢で構える。脚部ホイールは地面に付けたまま、ベルの方へ鋭い視線を送る。

『何考えてるのか知らないけど、もうこれで、終わり——ッ！』

二度目の跳躍。前のそれよりも早く鋭く、上段に振りかぶった緋色の刃がガーネット目がけて振り下ろされる。直撃すればまず助からない。それでも、真琴は叫んだ。

「今！ 突っ込んで、ガーネット！」

『おっしやあああああッ!!』

『え、ええ!! 何考えてんのさホント……ッな?』

副腕の感触に覚えた違和感に視線を向けると、ジークムントの根元がフォールディングナイフのアーム部分で挟み込まれていた。予期せぬ事態にベルは反応できず驚きに目を見張る。

「そのままませッ、ガーネット！」

『うおおおおりいやあああああッ!!』

『うわ、わわわ——ッ!?!』

アーム部分はそう長くは保たない。短期決戦を仕掛けるべく、ガーネットはジークムントを挟みこんだまま強引にホイールを回し、ベルごとチューブステージの外壁に思い切り叩きつける。

「か、勝った……ッ!」

「……ベル、今だ」

『へへ、りよーかいつと!』

『んな……ッ!?!』

立ち込めた白煙の向こうから躍り出るや否や、ベルはガーネットの懐に潜り込み盾を装備した左側の副腕を忍ばせる。

マズイ、と思った時には既にガーネットの身体は反対側の壁に激突していた。

『ランドグリーズ・ジュバルツ……ヒット確認。ふう、危なかった』

「が、ガーネット!? 大丈夫!?!」

ステージに帰ってきたガーネットは先ほどの二と同様に、目をくるくるとまわしながら完全に気を失っていた。

そして、同時に下校時刻を知らせるチャイムが鳴り響き戦闘終了の合図と相成った。

## 第二章 第3話

「そんな白熱した戦いになってたなんて……どうせなら僕も見たかったなあ」

学校を出てしばらく歩きながら、真琴は祐樹とのバトルの顛末を蓮とねねに話していた。もちろん隣には七海と祐樹も並んで歩いている。バトルを見逃して残念そうに呟いた蓮に、ねねが不貞腐れた声でツツコミを挟んだ。

「……いちいちワタシなんか追いかけてなきやよかったのに。そうすりや見れたじゃん」

「馬鹿だな。泣いて飛び出してたねねちゃんを放っておけるわけないだろ」

「ば……ば、馬鹿はどっちだよ……もう」

差し込む夕日の所為かねねの顔が紅色一色に染まっている。祐樹の肩の上のベルと、それから隣を往く七海はニコニコと少々含みのありそうな笑みを浮かべている。真琴や祐樹は特に気にも留めていない様子。

『お嬢様も、もう少し頑張ってみては如何です？』

「が、頑張ってる……つもりなだけだなあ」

「？ どうかしたの西園寺さん？」

「なな、何でもありません」

なだらかな坂道を抜けて真琴たちは御神楽町の大通りに出る。途中の交差点に差し掛かったところで蓮と七海と別れる。二人の家は真琴たちの家とは方向が違い、七海はとても名残惜しそうに手を振っていた。

真琴の家は大通りを越えた先にある住宅街でねねも同じ方向にあたる。祐樹も途中までは一緒だと教えてくれたので三人で再び歩き出す。鮮やかなオレンジ色に染まった道を進んでいくとやがて小さな児童公園が見えてきた。

「あ、ワタシはこの辺だからそろそろ行くよー。じゃあねー」

「うん、また明日」

『じゃーねー』

肩の上でニニも手を振りながら真琴は彼女の背中に手を振る。公園まで来てしまえば家はほとんど目と鼻の先だ。再三歩きだそうとしたところに――何処からか泣き声のようなものが聞こえてきて真琴と祐樹は足を止めた。

「……………？ どつかで聞いたような声だけど」

『マスター、あっちの方で小さな子供が泣いてるよ』

ガーネットが指差したのは児童公園の端にあるベンチ。よく見ると確かに小さな子供がうずくまっついていて、その小さな肩が震えているのが見えた。

「ちよつと行ってみようか？」

『そうだね。困ってる人は放っておけないよ』

多少なら帰りが遅くなるのも構わない。真琴がベンチへと向かうと祐樹も無言でついてきてくれた。近づくにつれ子供の姿が徐々に見えてくる。すると、真琴たちの足音に気付いてフツと顔を上げる。バツサリ切り揃えられたシヨートカットに頬に張り付いた絆創膏。何処かで見えたことがあるような……？

「……あ、あれ？ 真琴……お兄ちゃん？」

「君、この前の神姫バトルの……確か、凜君だっけ？」

『一体全体どうしたのさ？ クリームは……あれ？ 今日はいないの？』

「く、クリームは……クリームは……う、うう……うわあああああん!!」

「お、おわつとッ？」

突然凜に抱きつかれるも事情がさっぱりわからない。泣きじやくる凜の頭を撫でながら真琴は何があつたのか詳しく訊ねることにした。

※

『えつと、要約すると……だ。神姫バトル大会の帰り道、道に迷っているフブキ型神姫を助けようとしたら君は急に意識を失って、気が付いたらクリームはいなくなっちゃったってわけか』

「うん……うん……ひぐッ、ぐす……」

多少はなりを収めたものの凜はくしゃくしゃに顔を歪めながらこくこくと頷く。隣に腰掛けた真琴の腕に凜はぎゅつと抱きついている。

「色々、探してるんだけど……ぜんぜん、見つからなくて……それで……」

「……そういえば」

凜の話聞いて思い当たることがあつたらしく、祐樹は携帯端末を取り出しとあるページを表示すると真琴に見せた。それはニユースの記事で大きく見出しに「誘拐か？ 謎の神姫失踪事件」と書いてあつた。祐樹の肩に乗っていたベルが口を挟む。

『……最近多発してる謎の神姫失踪事件だよ。子供とか大人だとか関係無しに何人か被害にあつてゐるみたいなんだけど。』

もしかしてさ、その子のクリームつて神姫もこれに巻き込まれたんじゃないかな。ほらここに、目撃者の証言のトコに黒い神姫を見たつていう証言が多いでしょ。フブキ型の基本武装つて黒っぽいから、もしかしたらもしかするんじゃない？』

「でも、フブキ型つて言つたつて……」

グループK2社が開発した忍者をモチーフに制作されたフブキ型神姫は、アーンヴァルやストラーフと並ぶ武装神姫初期世代の機体。一度は廃れた過去があるとはいえ、その従順で一途に主を想う性格設定に惹かれるオーナーやマスターも少なくなく、その根強い人気から再版された過去のある神姫だ。一昔前ならいざ知らず、今現在となつては

見掛けても特別珍しい神姫とは言えない。

「クリーム……どうなっちゃったのかな……オレ……オレ気になって……」

「凜君……」

放っておけばまた泣き出してしまいそうな凜の表情を見て、真琴は小さな肩を優しくポンと叩いた。

「……わかった。僕とガーネットがクリームを探すのを手伝ってあげるよ」

「ほ……ホント!? ホントにいいの真琴兄ちゃん?」

『そう言ってくれると信じてた。流石は私のマスターだね』

『どうするユーキ? ボクたちも手伝う?』

「……乗り掛かった船だし、付き合うよ」

「ありがとう、祐樹君」

「いいって。……それより、どうやって探す? 人より小さな神姫を探すのはとても大変だし、それと……真琴君、時間は大丈夫か?」

「時間……あー、えっと」

広場の時計を見上げると時刻は6時を過ぎたところ。門限は特に定められていないのだが……母や姉に余計な心配を掛けるわけにもいかない。一応連絡はしておこうか。自宅にコールすると、出たのは母ではなく姉の風花だった。



「はいはい」ノ瀬ですけど……って真琴？ どうしたの」

「姉さん……でもいいか。あの、今日ちよつと帰りが遅くなりそうだから連絡しておこうと思つて」

「遅くなりそう？ ……姉さん、朝帰りは許さないわよ」

「そ、そんなに遅くならないよ。ちよつと友達の神姫が行方不明になつちやつてそれで……」

「神姫が行方不明……？ ふうん……」

「……姉さん？」

不意に風花の声のトーンが落ちドキリと心が冷える。余計なこと言つたせいで咎められるかと身構えるも、返つてきた返事は意外なことにあっけらかんとしたものだった。

「そういうことなら仕方ないわね。母さんには言つておくから気をつけて行つておいで」

「う、うん……なるべく早く済ませるから。じゃ」

連絡は済ませたし早速行動に移る。とりあえず公園に居続けても埒が明かないためひとまず移動する。

「さてと。じゃあまずは何処から探そうか？」

『闇雲に探してもダメだよマスター。こういうのの基本は聞き込みだよ聞き込み』

「神姫センターに行つてフブキ型神姫を見かけてないか聞くべきだと思う。怪しい神姫を見れば覚えてるはず」

「それぐらいならオレだつてやったよ！ でも、全然で……」

「……時間も変われば人も変わる。新しい情報があるかもしれない」

「そ、そういうことなら……」

祐樹の言葉に従い三人は神姫センターへと向かう。以前訪れた時は日中で活気に溢れていたが、夕刻を過ぎた神姫センターもまた大いに賑わっていた。前に比べれば大人の割合が増えた感じだろうか。そんな中に制服姿のまま入るのにほんの少しだけ抵抗があつたものの、3階フロアで同じ制服姿のマスターを見て考えを改めた。

「さて、聞き込み開始だね」

『何か探偵つぼくてワクワクするよね。……あ、そんな目で見ないですよーキ。真面目にやるつてば』

「お、オレももう一回聞き込みしてくる！」

「……聞き込みが終わつたら、あそこの売店で待ち合わせしよう」

三人はそれぞれ別方向へと歩きだし聞き込みを開始する。神姫マスターやオーナーは老若男女問わず様々だ。真琴はマスターやオーナーに、ガーネットはその神姫たちに

と物怖じせずフブキ型神姫の目撃していないか訊ねて回っていった。

……結論から言うと、結果は芳しくなかった。

一足先に売店へと戻った真琴はテーブルに突っ伏しながらぼそりと呟く。

「……ダメだね、全然」

『マスターってば諦めるのが早いよ。アニメやテレビみたいにも上手いくとも思ってたの?』

「そりゃまあ……そうなんだけどさ」

十人ほどに聞いて回ったのだがそれらしい情報は一切手に入らなかった。喉が渴いたので注文したオレンジジュースのストローに口をつけてから真琴はため息を一つこぼす。

「……凜君や祐樹君はどうなったのかな」

『凜君ならこっち向かってるよ。……ほら』

ガーネットの指差した方向には、真琴同様成果があまりよろしくなかったらしい凜がとぼとぼと肩を落としながら歩いている姿が見えた。

「……………ダメだった」

「そ、そっか……」

気まずい沈黙が流れ、真琴もガーネットもどう声を掛けたらいいのやらと困り果て

る。どんよりと漂う重苦しいオーラに潰されてしまいそうになると、今度は祐樹とベルが戻ってきた。

『たつだいまー……って、そんな暗いお出迎えいらないうって』

「いや、全然情報が無くなって……祐樹君の方は？」

「……一つ、手掛かりになりそうな情報が聞けた」

「ほ、本当!？」

座っていた椅子をふっ飛ばす勢いで凜が身を乗り出し祐樹の報告を待つ。一拍間を開けてから祐樹は静かに語りだす。

「……ついさっき、ここに来る途中でフブキ型の神姫が走っているのを見たって話が」

「走ってたって……それじゃ別に普通じゃなか。神姫だってお使いぐらいは出来るんだし」

「入った先が、誰も利用していない空き家だとしても？」

「空き家……?」

『だいたい場所も聞いておいたよ。地図のデータも……ほら』

アプリケーションで表示された地図に赤い点が明滅している。この神姫センターからほど近い住宅街の端にあたる場所だ。歩いて10分程度だろうか。凜は不安げな眼差しで地図を食い入るようにつめている。

「ここに、クリームがいるの？」

「行ってみなきや分らない。……どうする？ 真琴君」

『ここで尻込みするようなマスターじゃないさ。だろ？』

「う、うん。もちろんだよ。凜君のクリームを助けなきやいけないからね」

本当は然るべきところに連絡した方がいいんじゃないかとも思ったが、ここまで来たのなら後には引けない。空になったカップをゴミ箱に放り投げると、真琴たちは神姫ゼンターを飛び出し住宅街へと向かった。

## 第二章 第4話

通り過ぎる家々には温かな光が灯っているのにも関わらず、その場所は夜の闇を無抵抗に受け入れたかのように漆黒に染まっていた。

「……だね？」

真琴たちが辿りついたのは、周囲の住宅街から切り離されてもはや別空間と化してしまつた二階建ての一軒家。空き家の通り中に人のいる気配はなく当然明かりなどもない。周囲の窓から漏れる光や街灯の光でぼんやりと浮かび上がっているような印象で、オバケ屋敷だと言われてもすんなり頷いてしまえそうな奇妙な迫力が漂っていた。

「……何か見えるか？」

『掃除が全然行き届いてないね……窓なんかホコリまみれで、クモの巣まで張ってるし』  
「こ、こんな場所にクリームがいるの？ 何か、あの……こ、怖いんだけど……」

上目遣いに見上げる凛の顔は完全に怯えきつていて、以前のやんちゃやような雰囲気は綺麗さっぱり失せていた。まるで女の子のように体を縮こまらせる凛の頭に真琴はぼんと手を乗せた。

「大丈夫。怖くなんかなくて。僕も祐樹君も、ガーネットもベルもいるんだし」

『……声が震えてなければもうちよつとカツコがつくんだけどね』

「き、緊張してるだけだよッ」

「ベル、偵察を頼んでいいか？」

『りよーかーいっ』

その小さな体軀を生かし、ベルは鉄柵をするりと通り抜けると玄関へと飛んでいく。真琴たちは固唾を呑んで様子をうかがう。ベルはドア周囲を確認し終わると、不意にドアノブレバーに飛び付き全体重を乗せ始めた。

『ちよ、鍵なんか開いてるわけないのにあんなコトして……いっ』

「も、もう少し様子見ようよ」

ハラハラと落ち着きがないガーネットをなだめつつ真琴もその始終見守る。レバーはゆつくりと下り、それを見たベルが壁を蹴ると同時に扉がゆつくりと開いていった。

「行こう」

「わ、わかった。じゃ、僕たちが行ってみるから凜君は」

「い、嫌だよ！ オレだつて一緒に行くよ！」

「……仕方ないな」

もしも……が本当に神姫誘拐犯の根城だとしたら何が起こるか分からないし、危険だから凜には帰ってもらおうと思つていたが……その頑なな表情から察するに素直に

帰ってくれそうにない。

「僕たちから離れちゃダメだからね」

「う、うん！」

凜にがつしと左腕に抱きつかれ一瞬戸惑うも、小学生だししょうがないかと諦め真琴は祐樹の後をついていく。

『……なあんか、引つ掛かるんだよなあこの子』

肩の上でガーネットはやけに真琴にくつつく凜を見つめていたが、空き家に踏み込むのと同時に意識を部屋の奥へと向ける。

内部は至って普通だった。

正面にリビングと思しき場所へ向かって続く廊下が伸びていて、その脇に二階へと続く階段が見える。だが見えるのはそこまでで、その他一切は暗がりではほとんど見えな  
い。

「携帯電話のライト使う？」

「いや……ベル、頼む」

『はいはいっと。ちよっと待ってね』

祐樹の指示を合図にベルの瞳に光が灯ると、彼女の視界がライトグリーン一色に染まり室内の様子がハッキリと映し出される。



「暗視ゴーグルと同じ機能。先にベルに調べさせて自分たちの安全を確保しないと」  
「す、凄いな……」

周囲をあらかたスキャンし終わったのかベルはふうと一息ついてから祐樹の肩に飛び乗る。

『とりあえず一階は調べなくていいと思う。この廊下、埃が溜まりつ放しで誰かが通ったって痕跡が無いんだ』

「じゃあ……上か？」

『分かりやすいぐらいに、人の足跡が付いてるからね』

二階へと続く階段を指差すベル。ちょうど人の足と同じ形の空白が出来上がっている。大きさは真琴たちよりもやや大きい。足跡はそのまま階上へと吸い込まれるようにして消えている。ごくり、と生唾を飲み込んだのは真琴だったか凜だったか。

「この足跡、靴のままだ」

「け、結構大胆な人……なんだね」

「ど、土足で踏み入るのって、よくないんじゃない？」

『……二人とも、分かりやすいぐらいにビビってるねえ』

「び、ビビってなんか——！」

「り、凜君しーッ！ しーッ！」

慌てて凜の口元を抑え階段を見上げるも物音一つしない。真琴が胸をなで下ろしている間に祐樹はベルを先行させながら静かに階段を上り始めていた。

上つてすぐドアがいくつも見えた。ドアは全部で四つあり一つは階段を越えた正面に。その両端に一つずつと右手側の付近に一つ。最後のは恐らくトイレか何かだと思われる。

「真琴君……あれ」

祐樹が指を差したのは左端にあるドア。そこだけ半開きになっていて、中から薄明かりが漏れていた。

「くそ……楽な仕事だって言ったから受けてみれば………つたく………」

薄明かりに次いで、今度は誰かの呟きが聞こえてくる。低めの男の声だった。真琴たちは階段からわずかに身を出して様子をうかがう。

「誰か………いるね。やっぱり誘拐犯………なのかな」

「………もう少し様子見て、その後ベルを向かわせる」

「ええッ？　でもさ、ここで見張つてて警察の人に連絡した方が」

「サイレンの音で気付かれたらマズい」

「じゃあ………どうするの？」

『素直にお願いしてみる？　神姫を返してくださいってさ』

『そんなんで返すヤツいないだろ……』

「……俺たちが先に行くから、二人はここで待ってて」

祐樹はそう言うのと階段から一步踏み込み足音を忍ばせながら部屋へと向かう。真琴も心を決めた。

「ぼ、僕も行くよ」

『フブキ型神姫は私たちに任せときな。マスターたちは誘拐犯を頼むよ』

「二人掛かりなら何とかなと思う……行くよ」

ベルを肩に乗せた祐樹が躊躇なく歩きます。半歩ほど遅れはしたものの真琴も追いかけて、そして一度ドアの前で立ち止まる。祐樹の目線を受けこくりと頷いて返す。祐樹はドアを勢いよく開け放ち一気に侵入していった。

「うわ!! な、何だお前ら!!」

中に居たのは大学生と思しき青年だった。厚いレンズの眼鏡に冴えない風貌で、少なくとも真琴たちよりかは年上の印象だ。家具が取り払われた殺風景な空間にノートパソコンを置いて、彼はその正面で何やら作業をしていたらしい。突然現れた真琴たちに驚きを隠せない様子でディスプレイの光に照らされた顔には焦燥の色が浮かんでいる。

「お、オレのクリーム……返せよ!」

「はあ? クリーム? 何の話を……」

『アンタ、最近この街を騒がしてる神姫誘拐犯だろ。慌けても無駄だよ』

「は、はあ!? な、なんでそんなこと知って……あ」

『うわー、自分からボロを出すなんて情けないなあ……』

「う、うるさい! こうなったら……排除しろ、ツバメ!」

『……御意』

何処からともなく響く神姫の声。

そして、闇の中からひっそりと溶けだすかのように現れたのは、黒い衣を纏い狐の面を被った銀髪の神姫。

「あ、あの神姫だよ! オレが見たフブキ型の神姫!」

「……犯人で間違い無しだね」

「ツバメ、時間稼ぎをしろ! 俺は逃げるから!」

「え、逃げるってここ二階で……ああッ!」

誘拐犯は窓を豪快に開け放つと脱兎のごとく逃げ出した。屋根伝いに進み路地に着地すると、そのまま全速力で駆け出す。

「ど、どうしよう!? 誘拐犯が逃げちゃって——」

「ま、待てよ! 逃げるなあッ!!」

「凜君!? ちよ、危ないって——ああ行っちゃった!」

誘拐犯の男を追いかけると凜も同じように窓を飛び出し闇の向こう側へと消えて行く。残された真琴とガーネット、そして祐樹とベルに加え件の神姫であるツバメの計五名が部屋の中で立ち尽くす。

「真琴君は、凜君と誘拐犯を追いかけて。僕とベルでこの神姫は相手するから」

『脚の速いアーク型なら見失うこともないよね。ボクたちも後から行くから、ほら行つた行つた!』

「わ、わかつた!」

階段の方へと消える真琴を見送つた後、祐樹とベルは音もなく抜刀したツバメと対峙する。ROGを起動し、室内に影響を及ぼさないよう配慮しようとマップディスクを取り出そうとして――

『ユーキ、しゃがんでツ!』

「――ツ!?!」

ベルの声に合わせしゃがんだにも関わらず、祐樹の頬に鋭い痛みが走る。手に当ててみるとぬめりとした感触が伝わってきた。

「……人間に攻撃できるようになつてゐるってことは」

『違法改造《イリーガル》神姫ってヤツだね。……大丈夫、ユーキ?』

「問題ないよ。……相手にするのは初めてだけど、何とかなると思う」

『恨みはありませんがマスターのためです。……死んでもらいます』

『これがホントの物騒神姫……ってちよつと！ そんな冷たい目で見ないでつてば、ふざけてないよもー！』

「来るぞッ」

ベルの剣とツバメの刀がぶつかり合い、散り合う火花が暗い室内を僅かに照らす。

『ささつと片付けて、早く真琴クンに追いつかなきゃね』

「……ベル、起動する。準備は良いか？」

『いつでも大丈夫だよ』

短期決戦を仕掛けるべく祐樹はROGのコントロールパネルを起動させ、画面端のアプリケーションに指を滑らせる。

警告を促す表示を飛ばし、データをインストールさせると同時に祐樹の視界が少しずつぶれていく。

『さあてと……これで全力で動ける！ こうなったボクたちは無敵だからね！』

直後、祐樹の視界とベルの視界とがリンクし、今彼の目にはベルの見える世界が映し出されている。

ROGの機能を限界まで引き上げることで実現した、選ばれた者のみが許される特注のアプリケーション。

『フル・ライドシステム』

「……3分以内で頼むよ、ベル」

『りよーつかい!』

早く片付けて真琴に合流しなくては。

手にした剣をダブルブレードへと組み替えると、ベルはツバメに向けて疾駆した。

## 第二章 第5話

逃走した誘拐犯を追いかけて飛び出した真琴は、ROGに表示されているガーネットの信号を辿って街の外れにある寂れた工場跡地に辿りついた。

錆が張り付いた鉄製の門はボロボロでほとんどその機能を果たしていない。ほんの少し小突いただけで錠前が崩れ落ち、ギギイと悲鳴にも似た甲高い金属音を立てながら工場の正門がゆっくりと開く。

「……か、勝手に入って大丈夫……だよね」

砂利に混じってネジやボルトのような細かな部品がいくつも散乱していて歩く度にカチカチと音を立てる。真琴はROGのデータを頼りに薄暗い工場の中へと進んでいく。

「ガーネット……？ 何処にいるの……？」

『……マスター、聞こえる？』

「わ、つと……うん、聞こえてるよガーネット」

ROG越しに聞こえる神姫の声に安堵を感じながら、真琴は近くの物影に隠れてから返答する。そのまま待機していると、足元から所々黒い埃にまみれたガーネットが飛び



「込んできた。」

『一番奥に倉庫みたいな建物があるんだ。さっきの男はそこに入ってたよ』

「ご苦労様。それで凜君は？」

『トライクモード全開でここに来たけど……凜君の姿は何処にも見なかったよ』

「……どうしよう。先に凜君を探した方がいいのかな」

あの時の顔を見る限り、怖くなつて先に帰つたとは考えにくい。むしろ自分の神姫を意地でも取り戻して帰りたいと思つているのではないだろうか。……そう考えた時、嫌な予感が頭を過ぎる。

「誘拐犯に捕まつてたりしてないよね……？」

『それはそれで最悪なパターンだけど……どうする、マスター？』

「じゃあ、凜君を探しながら倉庫に行こう。……と、その前にガーネット」

『ん？ 何マス……ぶわっぶ』

真琴はポケットからハンカチを取り出すと、ガーネットの頭から優しく拭つて黒い汚れをいくらか落とした。

「帰つたらちゃんとクリーニングとかするから、それまで我慢しててね」

『あ……ありがと。マスター』

「よし、行こう」

錆ついたベルトコンベアが並ぶ工場内を抜け、真琴とガーネットは件の倉庫に辿り着く。大きな鉄製の扉とそれから従業員用の勝手口が見える。既に使われていないはずの工場なのに、何故か勝手口の方から蛍光灯の明かりがチカチカと漏れ出ていた。

「まだ電気が通ってるんだ……？」

『つまりまだ使われてるってことだね。で、どうする？』

「他に入り口……なさそうだね。あつちから入るしかないか」

『私が先に行つて様子を見るから、マスターは私が安全を確認した後に来て』

「でも……いや、うん。お願いするよ」

危険だと言いかけた言葉を飲み込み、真琴はガーネットを信じて先行させることにした。祐樹とベルの二人を見た時、真琴はもう少し自分の神姫を信用するべきだと思つていた。大切な神姫だからといって過保護にするのもよくない。彼女らは大切なパートナーだ。マスターである自分がそのパートナーを信じないでどうする。

なるべく音を立てないようにようドアノブを回し、僅かに開いた隙間から武装したガーネットが侵入させる。何かあればROGに知らせる手筈になっている。それまで、真琴は近くの物陰に待機することしか出来ない。

『……マスター、聞こえる？』

「聞こえるよ。でも、随分早いね。何かあった？」

『あー、えっとさ……』

『……なせ、放せつてばあ!』

「うるさいぞガキ! もうちつと静かにしてろよ!」

『……聞こえた?』

ROGから聞こえた囁みつくような声に真琴はハツとなる。凜が誘拐犯に捕まっているという最悪なパターン。恐らく、あのまま猪突猛進に突っ込んで逆に捕まってしまうた……というところだろう。

「怪我とかはしてない?」

『ちよつと待つて………ん、無事みたい。椅子にぐるぐる巻きに縛り付けられてること以外はね』

「他に、仲間とかはいる?」

『いないよ。さっきの男一人だけ。神姫の姿も……見当たらないなあ』

それなら、どうにか真琴だけでも凜を救出できそうだ。真琴は声を潜めながらガーネットに指示を出す。

「わかった。まずは凜君を助けよう。ガーネット、少しの間注意を引きつけてもらえる?」

『もちろんだよマスター。……具体的にはどうする?』

「銃の音とかで気付かせてガーネットは適当に逃げる。その間に僕が凜君を助けるから、それが終わったら連絡するよ」

『誘拐犯はどうするの?』

「……凜君を助けた後、そのままやり過ぎして」

『わかった。じゃ、早速始めようか!』

薄く開いたドアの間からパンツ! と乾いた発砲音が響くと、奥から慌てふためくような声が聞こえてきた。

「な、何だ今の音……あ、お前はさっきの神姫!？」

「……隠れなきや」

聞き慣れた駆動音に次いでドタドタと忙しない足音とが迫り真琴はドラム缶の影に隠れてやり過ぎす。

「ガーネット、無事でいてよ……」

小さく祈りつつ真琴は倉庫内へと侵入。中はカビっぽい匂いと埃が充満していて軽く呼吸をするだけで胸の奥が不快感に包まれる。倉庫自体はそこそこの広さなのだが、放置されているのか廃棄されたのか分からないコンテナや木箱、何に使うのか分からない物体などが雑多に積み重ねられている。

ちやうど部屋の中央だけぽっかりと空いたスペースがあり、その中心に椅子に縛り付

けられていた凜を見つけた。

「ま……真琴兄ちゃん!」

「しーッ。今解くから、ちよつと我慢してて……」

何か切れるモノ——足元に散らばっていた尖った瓦礫を手に取り縄を強引に千切ると凜の身体に自由になる。真琴がホツと安堵の息を漏らした途端、凜の身体が真琴の身体に飛び込んだ。

「わ、ちよつと……!」

「遅いよ兄ちゃん! 助けに来るなら、もつと早く……さあ……ッ!」

「ご、ごめん。えつと……だからほら、泣き止んで」

小さく震える凜の頭を優しく撫でながら、真琴は念のためにと周囲に注意を払う。ガーネットの言うとおり警戒の神姫などは見当たらない。監視カメラだとかそういう類のものもない。となればガーネットに連絡して早々に逃げなくては。

「でも、でもさ……み、見つけたんだよ! 誘拐された神姫の隠し場所!」

「え、本当? そりやお手柄じゃないか! それで何処に?」

目を腫らした凜は、この倉庫の端にある小さな扉を指差す。事務室か何かだろうか。か。

「アイツがああの部屋に神姫を持って行くのを見たんだ。……入ろうとしたらバレちゃっ

「ただけど」

「わかった。じゃあ、調べてみようか」

一応、灰色のドアに聞耳を立ててみる。……特に物音は無し。ドアノブに手を回すと鍵は掛かっておらず思いの外すんなり開いてくれた。

内部はというと、予想通り事務室らしい。職員室で見るとような事務机には埃が山のよう積もっていて、部屋の端に設えられてる棚も中に数冊ほどファイルが散らばっているだけ。だが、肝心の神姫は見当たらなかった。

「おかしいなあ……この部屋の何処かにあるはずなのに」

「隠し部屋とかあったりしてね。棚の裏に秘密の扉とかさ」

「……ま、真琴兄ちゃんって結構ロマンチストだね!」

「む、無理してフォローしなくても……ん?」

棚の根元に小さく光る何かを見つけた真琴はそっと手を伸ばしてみる。それは小指の先ほどの小さくて白いパーツなのだが、何処となく神姫のパーツのようにも見える。

「凜君、このパーツに見覚えある?」

「どれ……? って、それクリームのパーツだ! 腕に付けるヤツ!」

「……この棚、もしかして動いたりする? スイッチとか……あ!」

真琴がファイルを退けてみると、奥に小さなタッチパネルのようなものが見えた。恐

る恐る触れてみると、数冊のファイルだけを収納していた棚がカタカタと揺れ始め右方向にスライドしていく。

「秘密の扉だ……スゴイ！」

「ホントにこんなモノあるんだ……つと、ボケつとしてちやダメだ。ガーネットが引きつけてくれる今のうちに神姫を探しに行かなきゃ」

棚の裏に現れた銀色の自動ドアを越え真琴と凜は奥へと進んでいく。ぽつぽつと小さな照明が照らす細い廊下を進んでいくと再び扉に突き当たった。

「何だ……この部屋……？」

部屋は先の事務室と同じぐらい。白い壁に四方を囲まれ、そしてこちらにも収納棚がいくつかと中央にテーブルが一つ。何の飾り気も無い無機質な部屋だ。

「真琴兄ちゃん、棚の中に神姫が入ってる！」

「ホントだ。でも、みんなクレイドルに入って……眠ってる？」

クレイドルとは神姫の充電用の機械のことで、所謂神姫のベッドのようなものである。誘拐された神姫たちは無造作に放り投げられたり分解されたりなどはされておらず、全て丁寧にクレイドルの中に収納されていた。棚にも鍵が掛かっておらずなりと開いた。

「クリームは？ オレのクリームは?!」

「えっと……アーンヴァルタイプはこの子だけみたい。ほら」

柵の左端のクレイドルに眠っていたクリームをそつと持ち上げると真琴は凜へそつと手渡す。受け取った凜は両手でひしと抱きしめると、スリープモードに入っていたクリームを起こした。

「クリーム？ ……クリーム！」

『……あ、マスター！ ご無事でしたかつて……あれ？ ……は？』

「よかつたあ！ 怪我も無いし、無事なんだねクリーム！」

『はい、私は大丈夫です』

「積もる話は後にしよう。ここで捕まったら意味が無いよ」

ガーネットが外で時間稼ぎしてくれているとはいえそろそろ不審に思われていてもおかしくない。後はこの場所の事を警察に知らせることが出来れば神姫誘拐事件は全て解決することになる。立役者になれることは大いに嬉しいが、自分が帰れなくては意味が無い。

部屋を後にし、事務室から出ようとしたその時だった。

『はあ、い、そこまで。動いちゃダメつすよくお二人さん？』

「み、見つかった!? でも、何処に……ッ」

「真琴兄ちゃん、上の窓に神姫がいる！」



見上げたその先、夜光が差し込む窓の端に小さな人影がこちらを見下ろしている。大きな翼をはためかせ、影は颯爽と真琴たちの前に舞い降りると姿を露にした。

『ヒヒツ、もう帰るつもりだったんすけど……侵入者さんを発見しちやったら帰れないっすよねえ』

「蝙蝠の神姫……ウエスペリオ型？ でも、あの人の神姫ってフブキ型じゃ」

『フブキ型って……あー、あつちの捨て駒さんのコトっすね。アタイのマスターはあんなチンケな人じゃないっすよ。もっとイケメンで高学歴でマトモな人っす』

「やつぱり仲間がいたか……くそッ、どうしよう」

『仲間……ああ、はいはい。アタイはあの人の仲間っす。だから君たちを放っておくことは出来ないっすねえ。大人しくしてもらえませんか？』

「い、嫌だよ！ せっかくクリームを取り戻したんだから！ 絶対にここから脱出してやるー！」

「凜君……」

頑なな決意を見せる凜の手からクリームが飛び出すと瞬時に白の武装に身を包む。

『真琴さん、ここは私たちがお相手します』

「でも、君たちだけじゃ危ないよ！ 僕が何とかするから、二人とも——」

「今は真琴兄ちゃんのガーネットがないじゃん。ここはアタ……じゃない、オレとク

リームが戦うよ。お兄ちゃんに、恩返ししたいからね！」  
「……」

一度、真琴はウエスペリオ型神姫を見上げる。

彼女は余裕たっぷりの表情で、時折欠伸をしながらこちらを見下ろしている。次いで、周囲を見回す。彼女のマスターらしき人物は見当たらない。マスターの存在は彼女の言葉から明らかになってはいるが、肝心の姿は見当たらない。何処かに隠れているのだろうか。

『そろそろいいっすかー？ 待ってるのって凄く退屈なんすよー』

「……無理しちゃダメだよ。危ないと思ったらすぐ逃げてね？」

『了解です、真琴さん』

年下の子を残して逃げるつもりはない。

勝手口から這い出た真琴はすぐさまROGを起動させガーネットを呼び出す。

「ガーネット、聞こえる？ 緊急事態なんだけど！」

「お前の神姫ならここだよ！」

突如、建物の影から男の声が響き視線を向けて——絶句した。

『ご、ゴメン……マスター……ドジっちゃったよ……』

「が……ガーネットッ!？」

男の手には武装解除状態のガーネットが握りしめられていた。駈け出しかけた真琴を怒声が遮る。

「動くなよガキ。動いたらコイツを……壊すぞ」

「こ、壊すつて……ッ」

「邪魔されるとこつちが困るんだよ。神姫は何体持ち出した？ まだこつちの仕事が終わってないんだ、さっさと元の場所に戻せ」

「……ッ?」

不意に、何かキラリと真琴の瞳に映り込む。

男が立つ後ろ、ちょうど工場の屋根の上に小さな人影が月を背後に立っている。それが神姫と分かるのにさほど時間は掛からなかったが、何故か真琴はその小さな影をじいつと凝視して固まってしまった。

「……おい！ 無視してるんじゃないやねえぞお前！ コイツがどうなっても——」

——パチンッ！

まるで静電気が爆ぜるような音が響いたかと思うと、男の手からガーネットが解放されコンクリートの地面に放り落とされた。

「え……あ、が、ガーネット!?!」

その一瞬何が起こったのか分からず呆けてしまったが、ハッと我に帰った真琴はガー

ネットに駆け寄ると彼女の身体を抱え上げた。

「ガーネット、大丈夫……!?!」

『こ、これぐらいどうってことないよ……それより、今何が?』

『……少年』

「え……う、うわッ」

清流のように澄んだ声が足元から聞こえたかと思うと、見知らぬ神姫が仏頂面でこちらを見上げていることに気付いた。

夜空のような黒いシヨートカットに、ほとんど裸同然のような素体をクリアパーツの鎧で身を包んでいるだけの神姫はジト目でこちらを見つめている。

『ジールベルン型……だね。しかも、特別仕様のアメジストタイプだ』

『……確認。少年、名前は?』

「え? あ、真琴……一ノ瀬真琴……です」

『……了解』

それだけ言い残すと、ジールベルン型神姫はゆっくりと歩きだし凜やクリームのいる倉庫の方へと向かっていった。残された真琴は数秒ポカンと間の抜けたような顔をしていたが、やがて彼女を追いかけるため走りだす。

「ちよ、ちよっと! 君は一体何者? そっちに行つて何するの?」

『……アーンヴァル型神姫の援護、及び誘拐された神姫の救出。それが、私の任務』

「任務って……ええ？ 何で倉庫にいるのがアーンヴァルって知ってるの？ 誘拐された神姫のことも」

真琴の質問には答えず、ジールベルン型神姫は何の躊躇も無しに勝手口のすき間へ体を滑らせていく。

「……ええつと」

『マスター、ボーつとしてないで追いかけるな』

「あ、うん……」

口数が極端に少な過ぎて、何を考えているのか全く分からない。

そんなわからないままの神姫を黙って見送るわけにもいかず、真琴とガーネットは彼女の追いかけて走りだした。

## 第二章 第6話

夜の倉庫内を飛び交う白と黒の軌跡。

窓から注ぐ月明かりに照らしだされた特注のバトルフィールドの中、クリームは高速で動きまわるウエスペリオ型神姫に舌を巻いていた。

『マスター、相手はかなり速い……ッ！ 通常の射撃では思うように命中させることが出来ません！』

「目で追い付けないってどんな速さだよ、もおッ！」

縦横無尽に飛行するウエスペリオ型神姫に狙いを定めるが、あまりの速さに照準をロックすることができずほとんど出鱈目な射撃になってしまう。凜もROGを介してクリームにライドしているのだが全く補助にならなかつた。少しでも気を緩めてしまえばあつという間に視界から消え失せてしまう。神姫と凜自身の目とを合わせてやつと追いつけるという始末。

『イツヒヒッ！ 初々しいっすねえ。神姫を手にして一か月も経ってない感じっす。射撃も動きもルーキー丸出しな感じがいいっすねえ』

「う、うるさいな！ クリーム、レールガンを撃ちまくって！」

『了解ですッ!』

ケタケタと意地悪い笑みを浮かべる神姫に向けて高初速の電磁砲が吠える。電磁誘導により加速した弾丸をパタパタと蝙蝠の羽ばたきが如く軽快な動作で回避すると同時、彼女の手の中にはいつの間にか二挺の大型ライフルが握られていた。

『目標を捉えてスイツチするだけじゃ当たらないっすよ。こういうのは、相手の動きを予測して撃つんす。こうやって——ッ』

「ッ、来るよ、逃げてクリーム!」

この空間に散らばるコンテナを利用しない手はない。

凜はクリームに目配せし指示を送ると彼女は頷き、牽制射撃を織り交ぜながらコンテナの裏側へとブースターを吹かせる。もう少しで身を潜められる——その瞬間、クリームの頬を弾丸が鋭く閃いた。

『キャ——ッ!?!』

『そんなあからさまに動いちやバレバレっすよ。ちよつとぐらい捻らないと、上手い人には通用しないっす』

「くそう……ッ、どうしたら……」

『じゃ、今度はこつちの番っすね! そらそらッ!』

反撃に身を翻したウエスペリオ型神姫が二挺の大型ライフルが左右交互に号砲を

撃ちならしていく。上空から注がれる弾丸の雨の中、クリームは地面すれすれの低空飛行で回避していく。飛び続けるうち、やがてクリームの正面にコンクリートの壁が迫っていた。このまま飛び続けければ激突は必至。

「クリーム、その壁を蹴ってッ！」

『……！ 了解です、マスター！』

灰色の無機質な壁に脚部パーツを思い切り踏み込み、蹴飛ばす。壁を蹴った反動を活かしウエスペリオ型神姫と向き合う形に姿勢を変えると、クリームはそのまま両肩にマウントされたビームソードを抜き放つ。

機転の利いた一撃だったが——まるで霞でも斬ったかのように神姫の姿が霧散してしまった。

『なッ……!?!』

『いやはや、ルーキーながらいい作戦つしたよ。並みのマスターや神姫だったら確実にアウトしたけど……アタイは並みで収まる器じゃないんす』

「クリーム、下だ！」

『え——あつがッ!?!』

予期せぬ方向から思い切り下腹部を蹴り上げられ姿勢を崩し、よろけたクリームに向けて二挺ライフルが追い打ちを仕掛ける。弾丸はクリームの武装を易々と剥がし、背部



のウイングとブースターまでもが半壊してしまう。飛行を維持できずコンテナに着地すると、振り向きざまにレールガンを掃射。加速した弾丸は倉庫の壁に弾痕を残すばかりで一向に命中する気配がない。

「く、クリーム!？」

『まだ……やれますよ、マスター』

『おや、意外と耐えるつすね。でもまあ……そこまでダメージを追えばもう何も出来ないつすよね』

「ちくしょう……! このままじゃクリームが負けちゃう。何か出来な……ん?」

傷付くクリームの後ろ姿、破壊されたウイングユニットを見、そしてウイングユニットに装備されたブースターに目を付けた。ウエスペリオ型神姫に気取られないよう、凜はROGに向けて囁くように言った。

「……クリーム、聞こえる? そのブースターって切り離したりすることは出来るの?」  
『今すぐにもパージしようかと思っていたのですが……? どうかしましたか?』

「まだそれ、使えるかもしれない。無理言っただけ、まだ飛べるよね? クリーム?」

『私もこの翼も、まだ折れてはいません。マスター、どうぞ指示を』

「……うん! じゃあ……行って!」

凜の合図にクリームはコンテナを蹴飛ばし出来得る限りの最大速度で飛び出す。ウエスペリオ―神姫は愚直なまでにまっすぐに突っ込むクリームの動きを見て小さく嘲笑う。

『やぶれかぶれってヤツつすかね。ま、もう少し遊んであげるつすよ』

「クリーム、そこでブレーキ！ 切り離して！」

『はい！』

『は？ 何をして——ッ』

ウエスペリオ―型神姫と肉薄する直前、凜の指示に従いクリームがウイングユニットのブースターを二基ともパージすると、慣性に従いブースターが放りだされる。凜の狙いは、ソレだ。

そして凜の狙いを既にクリームも理解していたらしく、レールガンの照準は既にブースター中心部をロツクオンしていた。トリガーを引いた瞬間、目の前で轟音を響かせながら烈火の華が咲く。

「クリーム……ッ！」

後退したクリームを両手で受け止めると、彼女は手の平の中で疲れ切った笑顔を浮かべた。

「ゴメン、無茶させちゃって……」

『そんなことないです。むしろ驚きましたよ。機転の利いた素晴らしいアイディアで、  
どうにか彼女を撃退することが出来ました』

「うん……！　じゃ、早くここを出て真琴兄ちゃんに——ッあぐ!？」

『マスター?　……マスター!?!』

突如、凜が苦悶の表情を浮かべたかと思うとその場に崩れ落ちてしまった。額に脂汗を浮かべ、左手を左足へと伸ばしている。蒼白い月光に照らされた凜の左手は、思わず目を背けたくなるほど深紅色に染まっていた。

『いやあ……見た目以上に過激なコトしてくれたっすねえ。お姉さん、流石にちよつとカチンと来たっすわ』

「痛……あッ!　し、神姫に撃たれた!?!　嘘でしょ……!?!」

『あなた……違法改造神姫ツ!　よくもマスターを——っああ!?!』

右肩に奔った激痛にクリームは身を振る。

本来、神姫は人間に対しての攻撃をCSCの基本設定の内で禁止されている。そういったモノを無視し規格外の装備や行動を取る神姫のことを、一般に違法改造神姫『イリーガル』と呼び称されている。

目の前で不敵に微笑むウエスペリオ型神姫が——ソレだ。

人間に対して何の躊躇なしに攻撃が出来る時点で、既に正規の神姫ではない。

『好奇心は猫をも殺す……つしたつけ？　まあ安易に首を突っ込んだ自分を恨んでくださいいな。それじゃ、さようなら』

「クリーム！」

『ま、マスター……ッ！』

せめて凜だけでもと満身創痍の状態でクリームが凜の正面に身を投げる。意を決し目を瞑った瞬間——銃撃の音が倉庫中に反響する。

「……あ、あれ？」

『あ……あなたは？』

クリームと凜と、そしてウエスペリオ型神姫とを挟んだ場所に見知らぬ神姫が武装状態で立っている。

星の無い夜空のような瞳と漆黒のショートカット。ほとんど裸同然のようなペイントの施された素体にクリアパープルの鎧を身に纏っている。そして手には波打つように湾曲した小剣と盾を装備していた。

『ライフフル弾を斬り落としたって言うんすか……相変わらず滅茶苦茶な神姫っすね』

『……』

「凜君……!?　足、怪我したの!？」

「ま、真琴兄ちゃん……あの神姫は……いつつ、う……」

「わからない……けど、ガーネットを助けてくれたから敵ってわけじゃないと思う……」  
駆け寄った真琴はハンカチを使って応急処置を施しながら、件のジールベルン型神姫に視線を動かす。

「……問う。貴方達の、目的を」

「そこで素直に教えると思ってるんすか？」

「……………」

刹那、何の予備動作も無しにジールベルン型神姫がコンクリートの地面を蹴り飛ばし高速で踊りかかる。ウエスペリオ型神姫もそんな彼女の動きを予測していたらしく、背部の翼を大剣へと変形させ平然と攻撃に対処していた。

「ヒヒ、相変わらず短気なジールベルンっすね。そんなんじやマスターに愛想尽かれちゃうつすよ？」

「……………」

ジールベルン型神姫が繰り出す高速の剣閃を、ウエスペリオ型神姫は大剣の側面部を盾のように操りながら往なしていく。二人の動きは徐々に加速していき、やがては真琴や凜の肉眼で追い切れないほどの速度に達する。今まで見ていた神姫バトルが遊びに思えてしまうほどに、二人の神姫の動きは尋常ならざるものだった。

「く、クリーム……今、どっちが勝ってるの？」

『わ、わかりません……』

「ガーネットは？」

『……申し訳ないけど、全く見えない』

ぶつかり合う火花だけがかろうじて見えるものの、神姫の動きはもうほとんど見えない。ウエスペリオール型神姫が違法改造神姫なのともかくとして、ではジールベルン型神姫も違法改造の施された神姫なのだろうか。

『でも……あつちのジールベルンは違法改造って感じじゃないよ。何か……何となくだけど、わかる』

「じゃあ、誰かがライドオンしてるとか……？」

突然、ひと際大きな火花が散ったかと思うとジールベルン型神姫とウエスペリオール型神姫が弾かれたように距離を開く。お互い、身体のうちこちに小さな傷が無数に刻まれているが依然として戦闘態勢を保ったまま睨みあっている。

そんな中、ウエスペリオール型神姫の方から携帯電話のアラームのような無機質な電子音が聞こえてきた。

『ああ、はいはい？ え、もう帰って来いって？ もうちよつとぐらい遊んでも……ああ、冗談つす冗談。今すぐ飛んで帰りますって』

『……逃がさない』

走り出したジールベルン型神姫の攻撃を真上に飛んで避けると、ウエスペリオ型神姫は背部パーツを分解、再構築して形成された蝙蝠型ユニットのグリップに捕まり上空へと飛翔した。

『勝負はお預けつすね。次いつ会えるか……つていうか、出来れば金輪際会いたくなくてないつすけども』

『……ッ』

グリップはハンドガンのパーツで構成されており、彼女は倉庫の窓ガラスを撃ち抜くと夜の闇の中へと姿を消してしまった。そんな後ろ姿を、齒がゆそうに見送るジールベルン型神姫の背中を真琴と凜は呆然と見つめていた。

「何か……その、次元が違い過ぎて……」

「腰抜けちゃった……かも……」

『……一ノ瀬真琴、陽向居凜』

完全に脱力してしまった二人にジールベルン型神姫が声を掛ける。冷たく澄んだ声音だが真琴たちのことを案じているのが何となく分かって、真琴は少しだけ警戒心を緩める。

「助けてくれてありがとう。えと……」

『……救助の要請、完了。あと4分程度で到着』

「救助って……あ」

真琴の脳裏に過ぎる救急車とパトカーのサイレン。出来れば大事にしたくないと思っていたのだが、呼ばれてしまったものはしょうがないかと諦め小さく溜息を吐く。

『……任務終了。帰還する』

「ま、待って！ 君の名前は……？」

無視されるのかと思つたが、真琴の予想を裏切り彼女は小さく半身だけ振り返る。表情は硬いまま、ぼそりと一言だけ呟く。

『……………クレス』

それだけ言い終えると、ウエスペリオ型神姫と同じように窓から飛び出し夜の向こう側へと姿を消してしまった。残された真琴と凜は力が抜けたままその場で呆然としていた。

「……………あの神姫、凄かったね……真琴兄ちゃん」

『あんな強い神姫、初めて見たよ……』

「う、うん……」

遠く、サイレンの音がこちらに向かって近づいてくるのが聞こえてくる。

全身の緊張がドツと抜けた所為か、真琴と凜はへたり込んだまま気を失ってしまった。



## 第二章 第7話

真琴たちが激闘を繰り広げていた倉庫から、やや離れた場所にある小さな自動販売機。

そこに寄りかかる女性と、女性の肩に乗る神姫の姿が自販機の白い明かりに照らし出されている。手には、今しがた買ったコーラとレモンティーのパックが握られていた。

「お疲れさん、でいいのかな？」 スバル 昂君

「……どうも」

差し出されたレモンティーのパックを受け取った青年は短く答えると早速開けて中身を一口。

『相変わらず無愛想なヒトですねぇっておわあ!?! 今、首筋にヒュツて！ ナイフ投げられたですよ!?!』

『言動の訂正を要求。マスターは決して、断じて、絶対に、無愛想ではない』  
「……クレス、ナイフを投げるのは良くない」

名前を呼ばれ、マスターに窘められたクレスは武装を解除すると即座に彼の襟元にキュツと身を寄せた。それを見たマリアベルがやれやれと息を吐く。

『初めて会った時も思いましたけどお、ほんつとマスターにべえつたりな神姫ですう。……ちよつと病気なんじゃないかってぐらいにい』

『……………、恋……………の？』

『……………自分で言つて真つ赤になつて恥ずかしくないんですかあ？ 流石にドン引きですう』

「マリアヴェル、ちよつと静かにしてて頂戴よ」

マリアヴェルと呼ばれたマリーセレス型神姫の主——一ノ瀬風花はコーラを一口流し込んでからニツツと笑みを見せる。

「まずは、ありがとね。弟とそれのお友達を助けてもらつてさ」

「仕事のついでだから別に……………それに、困つてる人を見捨てるのは出来ない」

「お優しい事。……………で、肝心のお仕事の方はどうだったの？」

昂の瞳がわずかに細まる。芳しくない、と力無く首を振つて返す。

「また逃げられた。状況が状況だったし、追いかけるのも不可能だった」

『……………申し訳ありません、マスター』

「気にしなくていいよ」

しおらしく項垂れたクレスの頭を指で撫でると、彼女はほんのりと頬を染めしぼしその感触に身を委ねる。

「……前から聞いてみたかったんだけどさ」

不意に風花の瞳に光が宿り、昂を上目遣いに見つめる。

それは、野良ネコが面白い遊び相手を見つけたかのような表情で、昂は黙ったまま彼女の言葉を待つ。

「昂君が追いかけてるのって “一人” なの？ それとも……何かの “グループ” だったりする？」

「……」

見た目以上に利発な風花の言葉に昂は一瞬だけ言葉に詰まる。

そんな昂の反応を知ってか知らずか、風花はそのまま滔々と言葉を続けていく。

「二人の人間が神姫の戦闘データを欲しがってるのは変でしょ。しかも強い相手だけじゃなく老若男女、神姫のコアから直接吸い出して収集するなんて個人の趣味にしては頑張り過ぎ。どう見ても、裏があるよね？」

それを私に教えなさいよ？ とでも言いたげな風花の挑発的な瞳。昂はそれを静かに受け止め、小さく息を漏らす。

「……少し前の、神姫テロ事件を覚えてる？」

「2年前……や、3年前の？ 都心の方でFバトルが一時中止にもなったあの事件よね」

3年前、突如神姫を用いた爆弾テロが勃発し多くの神姫ユーザーを震え上がらせた。

テロ行為は主に都心を中心に広がり、一時期は神姫への風当たりがかなり強くなっていった時があった。

真琴たちの住む御神楽町でも同様で、一部の神姫ショップに苦情が殺到したり、マスターやオーナーを非難する声なども多数あった。しかし、実際にテロ行為のあった都心に比べれば実害はほとんどなく、程なくして解決へと進んでいった。

「アイツが、その神姫テロ事件の時に使われてたアプリケーションを作っていたグループと関わってるって噂を耳にしたんだ。……ホントかどうかは知らないけど」

「もう捕まったグループの……なるほど、残党狩りってヤツね。でも、爆弾アプリ作れる連中が戦闘データ集めるってのは何でなの？」

「……それを調べるのがオレの仕事」

「神姫探偵さんも大変ねえ。あの刑事さんといひ勝負な感じ？」

「あの人とオレとじゃ天と地ほどのキャリア差があるけどね」

神姫絡みの事件を専門とする刑事の話は有名でその界限で知らない者はいないだろう。昂も数回会って話をしたこともある。見た目は冴えない中年男性なのだが、時折鋭い瞳を見せる時がある。初めて会った時は神姫の惚気話ばかり聞かされていたのだが、人は見掛けによらないという事を目の当たりにしたような気がする。

この事件のことも、いつかは彼の耳にも届くかもしれない。

空にしたレモンティーのパックをゴミ箱に捨てると、昂は風花に背を向けて歩き出す。

「……レモンティー、ご馳走さま」

「いいわよこれぐらい。それと、また何か面白そうなコトがあつたら教えなさいよ」

そんな言葉を背中で受け止めながら昂は苦笑していると、クレスがちよんちよんと襟元を引つ張つてきた。

「……? クレス、どうかした?」

『……今後の計画の、確認』

「残念だけど、しばらくは動けそうにないかな……二、三日はお休み」

『じゃあ……あ……あ、の……』

蚊の鳴く声よりさらにか細い声が微かに耳朶を打つ。とても恥ずかしそうに、クレスはおずおずといった様子でぼそぼそと言葉を紡いでいく。

『……いい……いい、一緒に、寝ても……いい?』

「? それぐらい、別に大丈夫だけど……クレスはオレと寝るの好きだなあホント」

仕事中は氷の刃のような冷徹さを見せるのに、主と二人きりになると途端に甘えてくる。

そんな極端な相棒の顔を見つめながら、昂はゆっくりと帰路についた。

※

そして、事件の翌日。

登校してきた真琴を一番に迎えたのはねねと二二の二人だった。

「おっはよー真琴くん！ 聞いたよ聞いた、神姫誘拐事件を解決したのって真琴くんなんですよー！」

噂とは激流の如き速度で伝搬していくもので、ここに至るまでにも何人かの生徒に同じ理由で話しかけられていた。鞆の中身を机に移しながら真琴は答えていく。

「解決したって……そんな大袈裟な事してないよ。友達の神姫を助けに行ったら、成り行きでそうなっちゃったっていうか」

解決したといっても真琴が実際に犯人を捕まえたわけではない。当の誘拐犯は気が付いたら気絶していて、いつの間にかパトカーに乗せられていたし、誘拐された神姫を全て取り返したわけでもない。真琴がやったことは微々たるもので、それだけで解決したとは到底言えないものだと思う。

そんな真琴の心境は露知らず、ねねは何処かうつとりとした瞳を中空に彷徨わせていた。

「あの後そんな凄い事件に巻き込まれてたなんて！ いいなあ、羨ましい！ ワタシも行ってみたかった！」

誘拐犯ってどんなだった？ 神姫は持ってたの？ 誘拐された神姫ってどんなだった？ 教えて教えて〜」

「え、えつと……」

矢継ぎ早に繰り出される猫なで声に圧されながらも、真琴は本日何度目かの説明を繰り返す。

まず、犯人の目的は神姫の戦闘データだった。

本来、神姫の戦闘データはROGに蓄積されるのだが、今回の犯人が狙っていたのは神姫自身に蓄積されたデータだった。ROGのデータと神姫自身のデータにどんな差異があるのか真琴にはわからなかったが、犯人にとつては重要だったらしい。個人の趣味で蒐集していたという話だ。

そして、真琴も真琴で事情聴取を受けていた。

といつても、犯人に比べたら非常に簡単なもので、ほんの二言三言程度話しただけで解放された。祐樹もほぼ同じだった。

「あ、そういえば……」

事情聴取を終えて警察署を出る時、風変わりな人と話したことを思い出す。

肩にアーンヴァルmk2型神姫を乗せた中年の刑事で、聴取を終えた真琴に気さくに話しかけてきたのだ。他愛のない世間話をしながら、時折彼の神姫であるアトラの惚気

話を聞かされていた。

「事件の後の僕をリラックスさせようとしてくれたんだと思うけど……何か面白い人だったよ」

「ぶー……何であの時ワタシ帰っちゃったのかなあ……もったいない」  
「そんな楽しいコトでもなかったけどな……」

ふと、あの時見たジールベルン型神姫の姿が頭に思い浮かぶ。

彼女は何者だったのだろうか。

どうして真琴の事を知っていたのだろうか。

「ん？ どしたの真琴くん。ボケっとしちやってさ」

「……ううん、何でもないよ」

既に事件は解決した。

これ以上真琴が気に病む要素は一つも無い。

始業のチャイムを合図に、真琴は気持ちを切り替えることにした。



## 第三章 【避暑地に響く砲火】

### 第三章 第1話

「……なあ？ この集めた神姫のデータってさ、いったい何に使うの？」

PCの明かりだけが光源の薄暗い部屋の中で二つの人影が揺らめいている。どうやら二人とも男性で、一人は壁にもたれ掛かっけていて、一人はPCの前で黙々とキーボードを叩いている。画面には今まで収集された神姫の戦闘データが表示されていた。砲撃主体の装備で遠距離戦を好む者もいれば、高機動を活用したインファイター、中にはがむしやらに銃器を振り回すだけのルーキー丸出しの戦闘データも含まれていた。

「だってさ、傍目から見たら全然役に立たないもんだぜ？ プロのプレイヤーとかF大会のランカーならともかく、こんなほら……素人とか初心者とか雑魚ばっかじゃん。どー見てもゴミみたいな価値しかないと思うんだけど」

「……お前なら、経験値はどうやって稼ぐ？」

突然の質問に男は一瞬目を白黒させつつも、一応真面目に考えて返答する。

「は？ え？ 経験値？ えっと、それってゲームのつてコト？ そりゃゲームだったら……経験値を多く落とす敵とかアイテム使って稼ぐけど………は？ え？ そ

れが何の関係があるってのさ。ってか、ゲームの話でいいんだよな？ 神姫バトルの経験値とか言われてもわかんねえし」

「それは、ある程度の実力の持ち主になった人間の意見だな。普通、経験値とは自分と同程度のレベルの相手に挑み地道にコツコツと溜めるものだ」

「あー、なんだ。つまりオッサンはメ○ルス○イムとかグ○ウアツ○ルっていうありがたい存在を知らないカワイイソウな人間だつて言いたいわけ？ めんどくさいなら改造コードでドカーンつてレベル上げるのもアリだと思うけどなあ……で、その話って何か関係あるの？」

「……………」

「そこでだんまりかよ!? なんだよ、真面目に答えたのにオレが馬鹿みてえじゃねえか」  
『マスターマスター、ちよつと落ち着くつすよ』

噛みつく男の肩に止まったのは蝙蝠のような翼を持つ神姫だった。彼女は二人の間に割って飛び込むと、PCに向かう男の方へ飛び降り画面を覗き込んだ。

『これは……アタイが持つて帰つてきたデータつすね』

「俺が使い道を聞いたのに教えてくれないんだよこのオッサン。そりやちよつとズルくないかつて話してたんだ」

「……………」

すると、不意に画面が白と黒の無機質な図面に移り変わった。どうやらそれは神姫の設計図らしく、人型のイラストや関節の細部をスケッチしたものが細かく表示されていた。

「神姫の設計図……だな」

『でもコレ、見たことのないタイプの神姫つすね。これを作るのに戦闘データが必要なんすか?』

「……そういうことだ」

ぶつきらぼうな返事。

男はそれだけ見せるとまた無言に戻りキーボードを叩き始めた。

「ふうん……ま、いいか。何となく面白そうだしもう少し付き合ってみるさ」

『それにしても、本当に変わってるつすねこの神姫……』

描かれていたのは、左右対称にデザインされた“二つ”の人型のイラスト。

ページの末端には走り書いたような文字で『ツヴァーリゲ』と記されていた。

※

期末試験を終え、夏休みを間近に控えた七月某日。

その日、神姫部の部室である理科室では窓から注ぐ灼熱の日差しよりも熱い戦いが繰り広げられていた。

「いいぞハヤテ！ そのまま射撃で追い込んでいくんだ！」

『わかったよ、連！』

ハヤテと呼ばれたエウ克蘭テ型神姫はその特徴的な大型のウイングユニットを最大限に生かし、上空から大型ハンドガンによる射撃を繰り出していく。

「ガーネット、もっと飛ばさないと当たるよ！」

『わかってるさマスター！』

ハヤテの射線の先には、鮮やかな真紅色の神姫がトライクモードで全速力を出して砂漠の上を駆けていた。ガーネットと呼ばれたアーク型神姫はアクセルグリップを限界まで引き絞ると、最高速を維持したまま一直線に砂埃を上げている。

戦闘ステージは砂漠地帯。

ステージの随所に点在する遺跡の残骸を除けば、他は全て砂漠地帯という過酷な環境。自慢の機動力を誇るガーネットだが、こうも砂地が続くとホイールが砂に取られそうでも一瞬でも気を許そうものならスリップ必至の相性最悪のコンディション。

「よし、そのまま……」

ガーネットの進行方向の先には小さな窪みがある。連の作戦は彼女をそこまで誘導

し、落ちたところを狙って一気に強襲を仕掛けるというもの。今のところガーネットはハヤテの射撃を回避しようと懸命になっていて前方にはそこまで注意を向けていないはず。そう踏んだ連はハヤテにすぐさま次の指示を飛ばす。

「ガーネットの前方を狙うんだ、ハヤテ！」

『了解！ そこだッ！』

弾丸はガーネットの前輪付近を抉り砂埃を撒き散らす。衝撃で失速してしまったガーネットはトライクモードを解除して右足を突き刺すようにしてブレーキをかけるが、柔らかい砂地では思うように止まってはくれない。

『ああ、くそッ！ ホイールも滑って……！』

「よし、動きが止まった。ハヤテ、武器を変えるよ！」

ROGのメニューをスライドさせ、今ハヤテが装備している小剣『エウロス』と腕部に装着『ゼピュロス』、そして大型ハンドガンの『ボレアス』とをそれぞれタップし独自のメニューを展開させる。

連の操作に呼応したかのように各武器が一斉に解除されたかと思うと、ハヤテの手中で大型キャノンユニット『テンペスト』へ変形する。

『この勝負、アタシの勝ちだねッ！ ガーネット！』

『……ふッ』

テンペストのトリガーを引いたその時、ガーネットは不敵な笑みを浮かべると同時にトライクモードからノーマルモードへと変形する。ハヤテの銃口が閃光を穿つその瞬間を見計らつて、真琴はROGのメニューから自動行動《レール・アクション》の項目を素早く展開しタツプする。脚部ホイールが高速で逆回転を始め、ブーストと同時に砂地を強引に抜け出す。

『なッ——!?!』

『やられっぱなしってのは、趣味じゃないからねッ!』

テンペストの着弾で捲き上がった砂煙を突き破り、ハヤテと同等の高度に跳躍したガーネットはありつただけの弾倉を取り付けたライフルを構え掃射。至近距離から放たれた弾丸は全弾クリティカルヒットし、ハヤテの身体は文字通り飛ぶ鳥を落とすような勢いで砂漠に叩きつけられた。

それと同時に、ヴィジュアライザーの電源が停止する。

「よし、勝った!」

「ううん……負けちゃったかあ。それにしても、真琴君ずいぶん強くなったね」

『真琴君もそうだけど、ガーネットの動きもかなり良くなったね。これなら、夏の戦乙女杯でも通用するレベルなんじゃないかな』

「い、いやそんな。大袈裟だよ。僕はまだまだ……」

『謙遜する必要はないよマスター。私たちは確実に強くなってるんだ。ちよつとぐらい、自信持ったってバチは当たらないさ』

「……俺もそう思う」

真琴と連の神姫バトルを横で見ていた祐樹も小さく頷いて、何となく照れ臭くなつて真琴は頬をかく。夏の暑さに頬の熱も加わつて、真琴は何だか団扇が欲しくなつてきた。

「ねえねえ、ちよつと聞いてー!」

そんな折、ねねが大声を上げながら教室に飛び込んできて、自然と真琴たちの視線が注がれる。その後から遅れて七海もやってきて、これで神姫部の三年生が勢ぞろいとなる。

「で、どうかしたのねねちゃん?」

「あのさ、神姫部のみんなで旅行に行かない?」

「……旅行?」

突拍子のない言葉に連は首を傾げ、真琴と祐樹は顔を見合わせる。そんな最中、ねねがたどたどしい調子で事情を話します。

「えつとえつと、七海ちゃんの親戚の人が旅館やつて、よかつたら遊びに来たらどうかって誘われたんだってさー」

「それで、私が部活の友達も一緒にいいですかって聞いたたら快く了承してください。それで、あの……よかつたら皆で行きませんか？」

「太っ腹！ 七海ちゃんつてばホントイイ子だよねえ〜！ くふふう〜」

既に行く気満々なオーラがねねの全身からにじみ出ている。きつと、頭の中では温泉に入つてたりピンポンしてたり満喫しているのだろう。顔が完全にだらけきっている。

「と、突然のお話ですけど……御迷惑でなかつたら、あの」

『いいんじゃないかな。戦乙女杯前に英気を養うつてのもさ』

「僕もそう思う。連と祐樹はどうする……？」

「……別に、いいけど」

「僕も賛成だよ。じゃあ、念のために杜若先生にも報告しておこうか」

先生は隣の理科準備室で何やら「仕事」をしているとのことと、連と真琴の二人で出向くことに。この理科室の半分ほどの広さの部屋に、事務机と実験器具の入った棚が並んだその中で、杜若先生はパソコンとにらめつこの真つ最中だった。時折頭を掻くその仕草は、何とも理科系な雰囲気醸し出している。

「旅行……まあ、いいんじゃないか？ だけど、羽を伸ばし過ぎて大会に支障があると困るな……向こうでも、ちゃんとトレーニングするならいいんじゃないか」

何処となく心ここにあらずな返答だったが了承を得、部屋を出ようとしたその時、真



琴はふと杜若先生が向かい合っている画面に視線を向けた。

「……………」

「ほら、先生の邪魔になっちゃうから戻ろうよ」

「うん……………じゃ、失礼しました」

画面に映っていたのは、二体分の神姫の設計図だったような——気のせいだろうか。

## 第三章 第2話

御神楽駅から電車で揺られること二時間、下車した翠ヶ峰（すいがみね）駅からバスで山道を進むこと一時間の計三時間。真琴たちを出迎えたのは、思わず見惚れてしまうほど眩しい大自然だった。

「うわあ……！」

『凄い……まさに絶景だね、マスター』

肩に乗せたガーネットも、何処かうつとりとした様子で目の前に広がる光景に見惚れていた。

雲一つない空の下に、太陽を一身に浴びて青々と輝く山々。湖畔の水は透き通っていて、空や山の風景をくつきりと鏡のように映している。そして、反射した湖に逆さまに映った真琴たちが宿泊する旅館もまた、古き良き日本伝統を受け継いだ風情ある趣で、一枚の水墨画のような美しさを感じる。

「すごい！ あれ、あれ、あれでしょ？ あそこのおつきな旅館に泊まるんだよね、七海ちゃん！」

「はい、あれが私のお父様のご友人が経営している『翡翠荘』ですよ」

「……祐樹君、どつかで聞いたことのある旅館だと思わない?」

『あーハイハイ。ボク知ってるよ。確か一泊十万円ぐらいする高級旅館だよ。テレビでココをレポートしてるの見たことあるもん』

「……………凄いな」

庶民は近づくのですら躊躇しそうな高級旅館なのに、七海とねねは何の躊躇いも無しに進んでいく。……七海はともかく、ねねは恐いもの知らずなのだろうか。開け放たれた玄関の引き戸さえ高級品なのではないかと邪推してしまふ蓮と祐樹とは何となく肩身が狭かった。

玄関に辿り着くと、旅館の女将と思しき女性が真琴たちを出迎えてくれた。

「ああ、ようこそいらつしやいました七海お嬢様。お友達の皆さまも遠路遙々ようこそ」  
「今日から三泊四日ほど、よろしくお願ひします」

流星は財閥の令嬢と言ったところか、平時見せているような気弱さなど微塵も感じず、威風堂々としていて別人のようにさえ思える。

「では、お荷物を……シイナちゃん、手伝ってちようだい!」

「——あ、あああああ!!」

女将がその名前を呼んだ瞬間、突然玄関に飾られていた生け花の壺がカタカタと揺れ出したかと思えば、今度は何処からともなくドスドスと旅館の静謐な雰囲気をつち壊す

ような足音が聞こえてくる。すると、奥に見える廊下から一人の女性が颯爽と滑り出て、乱れに乱れた髪をそのままに素早く三つ指ついた。

「よ、ようこそいらっしやいましたた！ 囁んひゃ！ ひみや舌かんひゃつたよ……！」

「し……シイナちゃん……」

真琴たちの前にも関わらず、女将は呆れたような視線と溜息をシイナと呼ばれた女性に向ける。乱れに乱れた長髪に肩のほだけた着物。そばかすの残る顔は、真琴たちと同じ年か少し年下のような印象を受ける。

「シイナちゃん、もう少し落ち着きを……ね？ お客様の前なのに、そんな乱れた格好で、乱れた言葉遣いでは困るわ」

「うう……す、すみまひえん」

『シイナつてば、ホントそそっかしいんだから。しょうがないな、とッ』

女将に窘められしよぼくれるシイナの頭の上に、気が付くと小さな神姫が真琴たちを見つめていた。

『遠路遙々、ようこそ翡翠荘へ。七海お嬢様ご一行はこの私、朱音（アカネ）がお部屋までご案内いたします』

「わ、可愛い！ ちっちゃな仲居さんだね！」

大きく開けた肩周りに、着物の帯を思わせるボディペイント。犬轡人造舎が子供達への食事マナーをアピールするため、日本人に身近な食器である『箸』をモチーフに創り上げた和装の神姫、箸型神姫MMSこひる。他の神姫に比べ、非武装状態の彼女は日本人形のような通常の神姫とは異なる趣の可憐さがあつた。

「凄いなあ……旅館で働く職業神姫か」

『私とシイナはまだ見習いです。つても、シイナが物凄くドジなせいなんですけどね』

「は、はははあ……朱音ちゃんは厳しいなあ。……全く反論の余地が無いんだけど。あ、私は小昏（こぐれ）シイナっていうの。で、こつちはアタシの同僚で相棒の朱音ちゃんだよ」

一通り自己紹介を終えた後、真琴たちは今回宛がわれた部屋へと案内される。案内された部屋は全て個室で、真琴たちはそれぞれの部屋に荷物を預けた後ロビーで落ち合う約束をした。

『こんな古風な温泉旅館なのに個室まで完備してるなんて凄いな……あ、クレイドルもあるよ』

真琴が宛がわれた部屋は湖畔に面した部屋で、窓から雄大な自然に彩られた湖が見える。部屋は真琴の部屋の倍の大きさがあり、ペランダには洒落たテーブルと椅子。壁には見事な達筆で『くれなる』と書かれた掛け軸を始めとした骨董品が飾られている。旅

館なのでベッドは無いが、代わりに神姫用のクレイドルやチェリカンのサービスなどは完備されていた。

「……僕たちなんか泊まっちゃってよかったのかなあ」

時代が進み、近年では神姫と一緒に旅行したいというマスターやオーナーも少なくな、ここ翡翠荘でも同様のサービスを提供するため部屋を増やしたのだとシイナが説明してくれたのを思い出す。至れり尽くせりとはまさにこのことで、七海の友人と言うだけで宿泊できるのは少々後ろめたいような気がしなくもない。

『って、ボーっとしてちゃダメだよマスター。用意が出来たらロビーに行くんじゃないか？』

「ああ、そうだった。すぐに準備しようか」

ボデイバッグに持ち替え部屋を出て一階ロビーへと向かと既に全員揃っていた。

「これで全員揃いましたね」

「そういえば、何にも予定決めてないけど……これからどうしようか？」

突如決まった旅行なので、事前の下調べもしていなければ何をするのかというこれと言った具体的な目的も無い。全員、ROGは常に持ち歩いているため神姫バトルは出来るが、旅館の中では当然出来ない。

「それなんだけど、さつきシイナさんからハイキングコースがあるって話を聞いたんだ。

ほら、ここに翠ヶ峰自然公園ってあるでしょ」

ねねがシイナから受け取ったという地図を見ると、現在地点である翡翠荘からそう遠くない場所に『翠ヶ峰自然公園』と記された場所が見える。そして、ちょうど翡翠荘と自然公園の間に観光旅行者向けのハイキングコースの案内が載っていた。

「まずはここに行ってみない？ 今日の手前はハイキングコースを堪能して、それから自然公園で神姫バトルするって感じで！」

『そろそろ体鈍っちゃうから、早くバトルしたい』

「自然公園かあ……そうだね。景色の綺麗なところに来たんだし、せつかくなら満喫したいよね」

『大自然の中でツーリングするのも悪くないかも……マスター、公園に着いたら私が一番にバトルするからね』

『じゃあ、その時はニニが相手するのだ！』

翡翠荘から坂道を一度下り、ハイキングコースの出発点である小さな寺院に辿り着くと、真琴たち同様にハイキングに挑戦する人の姿が見えてくる。中には本格的な装備で臨む人もチラホラと窺える。

真琴たちは本格的なコースではなく、一番難易度の低い（そう地図に記されていた）ルートでゆつくりと自然公園を目指すことにした。木陰から零れる陽光に、しつとりと

そよ吹く風が冷たくて心地よい。緩やかな傾斜のハイキングコースだが、マイナスイオンたつぷりの空気のおかげか歩いていてもほとんど苦にならず快適だった。神姫たちも、思い思いの方法で自然を楽しんでいるようだった。

『あつはは。いいねえ、こういう場所で飛べるつてのもさ。蓮も、空が飛べたらいいのね』

「飛べるんなら僕だつて一緒に飛びたいつて」

『あー、体がウズウズする！ マスター、もう走つてもいいかな？』

「だ、ダメだつて。自然公園まで行けば思う存分走れるんだから、それまではゆっくりしようよ」

「七海ちゃん、明日とか明後日の予定とかも考えないと。肝試しとか、したくなあい？」

「わ、私そういうの苦手で……」

「だつたらホラ、真琴クンと一緒に……」

「あれ？ ねねちゃん呼んだ？」

「い、いーえー。何でもないですよー」

「……そう？」

うねるような山道を往き、途中で湧水を飲みながら進むこととおおよそ二十分ほどで目的地である翠ヶ峰自然公園に到着した。辺りを見回してみると、タオルで顔を拭う人の



姿や食事を取る人の姿が見える。時刻は二時を少し回ったところ。軽い空腹を感じていた真琴たちは近くの売店で少し休憩をすることに決めた。

「……………？ あれ、何だろう……………？」

今では珍しい瓶タイプのラムネに苦戦していたねねの向こう側、ちょうど湖を見渡せる展望台に、何故か迷彩柄の服の集団が整列していた。武装こそしていないものの、それぞれ肩や手には同じカラーリングが施された神姫の姿が見える。

「サバゲー……………かな。一番奥の人、ギリースーツ着てる」

「……………ギリースーツ？」

「草むらにカモフラージュする服だよ。神姫の装備にもあんなのがあるよね」

『……………あー、私は絶対に着たくないな、あんなの』

「あ、西園寺さんのプリユイーと同じ神姫が」

『……………いえ、あれはフォートブラッグ型ですね。背中に滑空砲を装備してますから。あとは、ムルメルティアに、飛鳥に蓮華……………でしょうか。他にもたくさん……………』

迷彩服の人物は総勢十名で、五人ずつのグループに分かれているらしい。先述のムルメルティア、飛鳥の持ち主が各集団のリーダーらしい。先頭に立って何かを話している。

「……………ちよつと、不謹慎じゃないですか？ ああいうの」

ハイキングを楽しむ集団ばかりのこの場で、迷彩服となるとずいぶん奇抜な印象を受ける。景観を損なう……と言つてしまふと少々言い過ぎな感があるが、少なくとも七海は怪訝な目で彼らを見ていた。

『ま、ボクたちには関係ないんじゃない。それよりさ、そろそろバトルやろうよ。あつちにさ、専用のヴィジュアライザーがあつたの見たんだあ』

「じゃあ、今日は僕と手合わせ願おうか、祐樹君」

「あ、真琴くんはアタシとね。二二の新必殺技を見せてやるんだからー」

反対方向に視線を移すと、人だかりが出来ているのを見つけた。ベルの言っていた専用のヴィジュアライザーを使ってバトルしているらしい。ラムネの瓶を片づけた真琴は、ふと振り返つて例の集団の方へと視線を向ける。

……暑く、ないのだろうか。